昭和48年 3 月11日発行通巻103号(毎日曜日発行) 昭和48年 1 月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

朝日=ラルース

3/11
220円

102

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１〜128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目次

世界動物百科　第102号

カラーページ

チドリ亜目（つづき）
シギ科　7
ダイシャクシギ　8
チュウシャクシギ　10
オグロシギ　12
オオソリハシシギ　13
アカアシシギ　13
ツルシギ　19
タカブシギ　20
イソシギ　21
キアシシギ　24
キョウジョシギ　25

私たちの仲間

ピグミーと動物と（中）すばらしい狩人たち　酒井傳六　3
澄んだ歌声　アマゾン動物記 14　伊沢紘生　6
カラーページ解説　日本のシギ・チドリ類 1　渡来する種とその識別法　高野伸二　27
生きものの世界への疑問 7　対立しない異端？　日高敏隆　28
漢字のふるさと 73　九官鳥（きゅうかんちょう）　藤堂明保　29
ペット相談室・仲間のひろば・裏表紙説明　30

表紙　アオアシシギ　撮影　高野伸二
表２　**日本迷鳥録**　ナベコウ

監修　森岡弘之（国立科学博物館研究官）
翻訳　中村三郎（早稲田大学助教授）

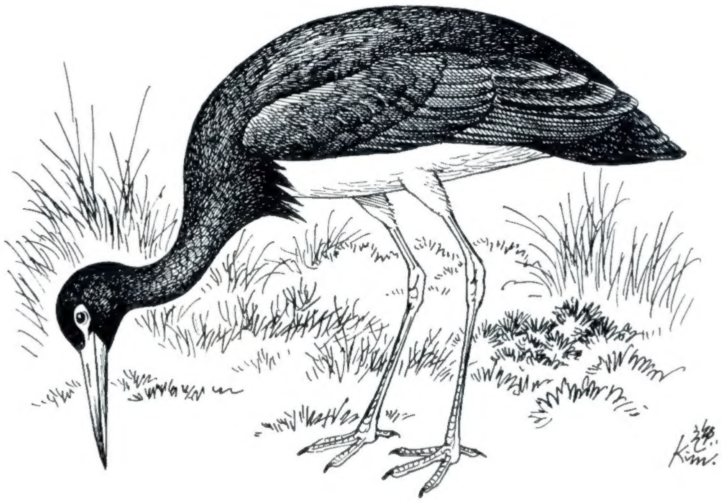
凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆　36

ナベコウ

Ciconia nigra



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

むかしから，松に鶴，というが，ツルはマツにかぎらず，およそ木にとまることはない。これは，コウノトリをツルと見あやまったもので，コウノトリ類は一般によく大木の梢近くにとまる。営巣もツル類は湿原の地上，コウノトリ類は樹上である。

さて，コウノトリ類はすべて白いように思われているが，黒いものもある。ナベコウは，腹だけは白いがそのほかは紫や緑の金属光沢のある黒色で，くちばしとあし，それに目の周囲は赤い。「ナベコウ」とは，鍋墨のように黒いコウノトリということである。全長約１メートルで，コウノトリよりは小さく，シベリア・モンゴル・朝鮮からヨーロッパ東部まで広く分布し，スペインの一部やアフリカにも及んでいる。日本では函館，東京，千葉，神奈川，八丈島，京都，徳島，高知，佐賀，熊本，鹿児島で記録がある。比較的単独性で，森林に近い湖沼や湿原にすむ。■

私たちの仲間
102号…3月11日

ピグミーと動物と 中 すばらしい狩人たち

酒井傳六 写真も

アフリカのタンザニアから大陸南端にいたる3000か所の地点に10万点を越える岩壁絵画・刻画が残っている。なかには先史時代に属するものも多く，そのモチーフはほとんど動物である。

この作品を残したものはこんにちブッシュマンの先祖であると一般に考えられている。ブッシュマンは，人種学上は区別されているとはいえ，ピグミーと同じように矮人族であり，同じように狩猟・採集によって生きている人種である。しかしブッシュマンの生存条件はピグミーの場合よりはるかにきびしい。なぜなら，かれらは熱帯雨林と対照的なカラハリ砂漠に生きているからだ。砂漠では水は少なく，動物相も植物相もきわめて貧弱である。

実証された絵画能力

アフリカの先史岩壁画とピグミーを関係づけることは不可能だろうか。熱帯雨林に露出した岩壁がない以上，かりに技術と欲求をもっていたとしても，古代ピグミーが岩壁画を森林のなかに残すことはできないのは当然である。こんにち森林の外にある岩壁画の一部が，ピグミーの先祖によって描かれたことはなかったであろうか。かつて，遠い日に，ピグミーはきわめて広い地域にわたって生きていたのであるから。一方，先史学の諸問題については，だれも「解決ずみ」とはいえないのであるから。

ザイールにピグミーをたずねたわたしは，ピグミーに絵をかいてもらうことにした。わたしは画用紙とマジックペンを森のなかへ持ちこんだのだ。たぶん，このような試みはこれまで一度としてなされていない。

『ゾウの踊り』の名手であるババナというピグミーが最初に描いた。かれのモチーフはゾウであった。ゾウのきばの長いこと，尻尾がほうきのように枝分かれしているのが印象的であった。名射手のひとりであるアティボというピグミーは走るアンテロープを描いた。第3のピグミーは山刀を描いた。20人のピグミーがにぎやかに絵を仕上げた。モチーフは動物が圧倒的に多かった。それらはゾウ，アンテロープ，カメ，ニワトリ，ヘビであった。それはピグミーの絵画能力をじゅうぶんに証明するものであった。

いつの日にか，アフリカの岩壁画とピグミーを結びつける議論がまじめに進められるかもしれない。わたしはただ，ホモ・サピエンスとして誕生して以来，たいした変化もない条件のなかで，動物とたえざる密接な接触をもちつづけているピグミーが，動物を描くことができるのは当然であるという指摘をするにとどめよう。ピグミーはその誕生以来，動物の形態と行動の入念な観察者であったし，いまもそうなのである。

こんにち，動物行動学は流行の学問であるようにみえる。その偉大な先駆者として，ダーウィン，ファーブル，パブロフ，モルガンの名をたいていの人はあげることができるであろう。とりわけ，あの親しみやすい『昆虫記』の著者，ファーブルの名はだれにも思いだされるであろう。

いうまでもなく，動物の行動の基礎に五感の活動がある。嗅覚，触覚，視覚，聴覚，味覚の，とりわけ嗅覚，視覚，聴覚の活動がある。いいかえよう。動物は何よりも，においと形と音に対して敏感である。それによって同族の存在を知り，敵の存在を感ずることができる。動物行動学はこのようなことを教えている。

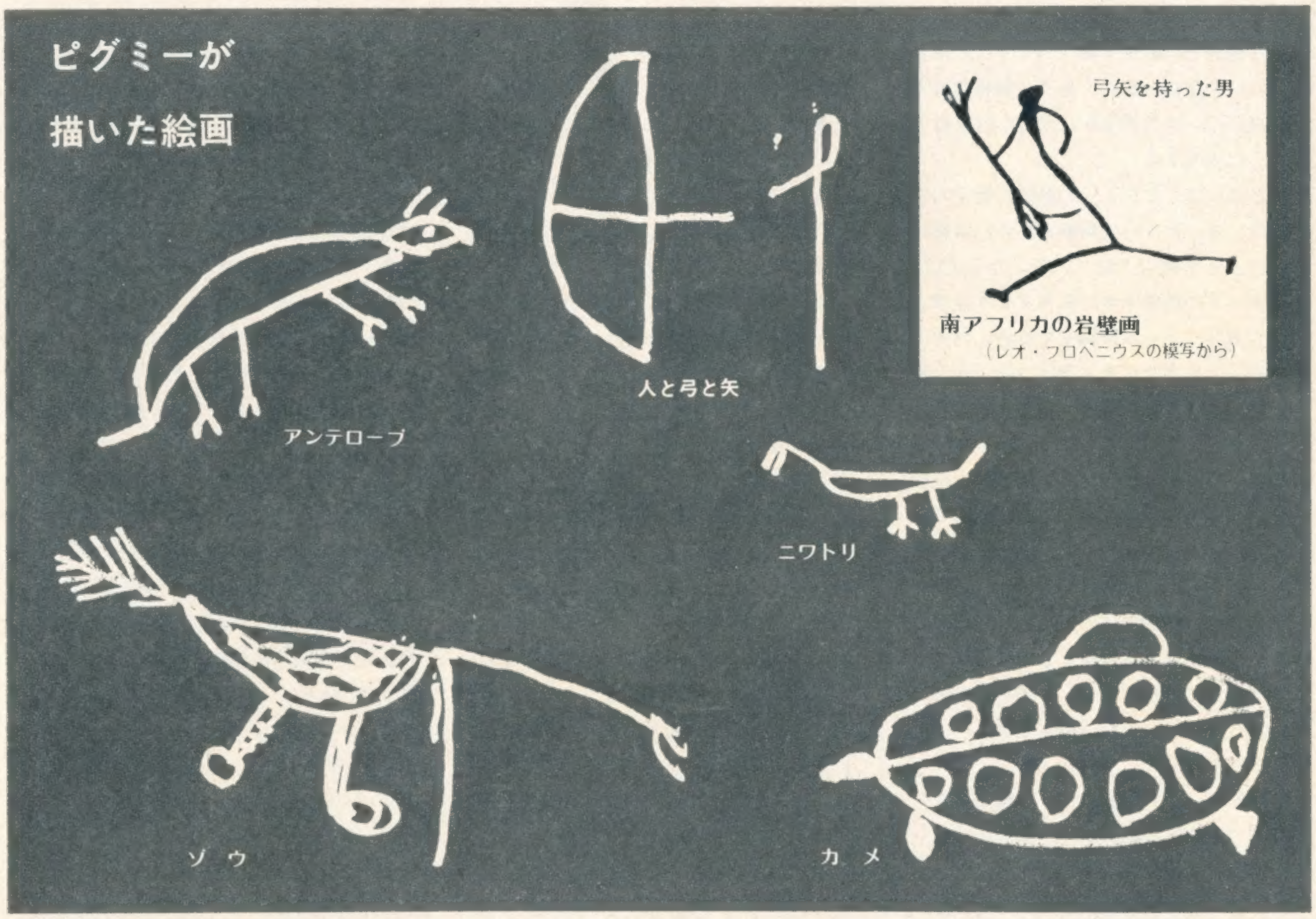
生まれながらの動物学者

ピグミーは，生まれながらのファーブルである。生まれながらの動物行動学者である。出産から数か月たつと，母は早くもその乳飲み子を抱いて狩猟に加わる。ピグミーは特別な施設に人を集める《学校》と称するものをもたない。家とキャンプと森が教育と訓練の場である。歩けるようになると，ピグミーの子どもは木にぶら下がる遊びをする。やがて子どもは弓矢を手にする。その弓矢は子ども用に小さくつくったものではない。大人の使う大きさのものを，親は子に与えるのである。ここでわたしは，ピグミーの親が《赤ちゃんことば》で子どもに話しかけることがないということに，読者の注意をひきたい。子どもは小型の大人として訓練されるのである。

動物が五感によって鋭敏な行動をとっている以上，この動物を追うピグミーはこれに対抗できる五感の持ち主でなければならない。においと形と音に対する感覚がとりわけ動物において鋭敏である以上，ピグミーもまたこの3つの感覚においてすぐれていなくてはならない。このような感覚は短期間の《学校訓練》のごときもので得られるものではない。乳飲み子のときから母に抱かれて森にはいるという絶え間のない訓練によってしか，この感覚の練磨は達成され得ないのである。

熱帯アフリカの住民の生理的早熟は一般に知られているところであるが，ピグミーもまた早熟である。12歳ないし14歳で男も女も結婚適齢となる。しかし，それよりもさきに，男のほうはすぐれた射手となっている。男子は10歳をすぎると一人まえの射手となる。名射手になるということは，獲物をしとめるという食生活上の利点のほかに，よい配偶者を得ることについても，有利な条件となるのである。ただし，ここで《若者の名射手》については少しばかりの説明が必要であるかもしれない。

的を射ること，つまり獲物を射ることに上達すること，それは名射手の条件である。しかし，遊びとしてではなく，生存のために獲物をねらうとき，射手は獲物を見つけだす能力をもっていなくてはならない。若者が名射手である場合は，見つけだされた動物を射つ能力がす



ぐれているということであり，動物を見つけだす能力については，年齢も高く，多くの経験を積んだピグミーのほうがすぐれている。したがって，完全な意味の《名射手》とは，動物を巧みに見つけだすことができ，それを巧みにしとめることのできる射手のことである。ピグミーがこの《名射手》になるのは30代になってからである。つまり，30年間の絶え間のない訓練がそのような能力をピグミーに付与するのである。またしてもファーブルに話をもどせば，ファーブルが『昆虫記』の第1巻を出したのは56歳のときであり，最終巻（第10巻）を出したのは87歳のときである。かれの観察が整理されるのには，これほどの時間が必要だったのである。


勢子の子どもたちが　動物を追いだすための草の棒をつくる

足跡探索に没頭する

ピグミーは多くを語らず，また体系的に述べる趣味も能力ももたない。しかしピグミーの動物行動学は明らかにユニークなものであり，すぐれたものであるにちがいない。動物学者が，長期の滞在によって，ピグミーから動物行動学を聞いて報告してくれることをわたしは願う。いままでそのようなことをした動物学者はいないからである。植物学については，カメルーンのピグミーについて，フランスの植物学者，ルネ・ルトゥゼ氏が先駆的な研究と調査を進めているが，動物学についてはそのような専門家はまだ現われていないからである。ピグミーに接近する人は，民族学者，文化人類学者，ジャーナリスト，宣教師であり，これらの人がピグミーの深く広い世界，とくに動物との関係を知りつくすことはとうていできないからである。動物学者の登場についての希望を，わたしは重ねてここに表明する。

とはいえ，ピグミーの動物行動学の片鱗は，ヨーロッパ人狩猟家あるいは旅行者によって報告されている。たとえば，イギリスの地理学者でありアフリカ学者でもあり，さらに狩猟家でもあったカットバート・クリスティ氏は，第一次大戦前に，つまり1912年から1914年にかけて，イツーリの森でピグミーとともに狩猟した経験を『ピグミーの国での大狩猟行』と題する著書にまとめているのであるが，そのなかに次のような叙述がある。わたしがこの部分をかなり長く紹介するのは，1910年代のイツーリの森のピグミーを記録する資料として興味深いものであるにかかわらず，本書がわが国で翻訳されたことがないからである。

◇　◇　◇

「ピグミーが，動物の——大型であると小型であるとを問わず——私生活を完全に知っていることが，わたしにとっての，より大きな興味の泉であった。かれらの足跡学はひとくちにいってすばらしいというほかはなく，いくたびか同じ場面に出っくわすうちに，ついにわたし自身がこの技術を知るにいたった。はじめ，かれらを動物の足跡探索という仕事に向かわせるのに，わたしは困難を感じた。しかし，ひとたびその仕事にかかるや，かれらは完全に没頭するのであった。没頭するかれらを見るのは，わたしにとっては，きわめて爽快であった。かれらは動物の足跡を見て，その年代を，つまりそれが新しいか否かを低い声でたがいに話しあったのち，ネコのように静かに歩き，急激な動きは何ひとつ起こさないように用心し，目の前をたえず見つづけ，しかし寸土といえども視界からのがさないようにしていた。ほんのわずかな音をもピグミーはとらえ，後ろを決して振りむかずに，とらえがたいしぐさによって，みずからの発見したものを，後ろの者に知らせていた。たとえば，かれはここで腰をおろし，かしこでは木の葉を落とすといったぐあいに，である」

「かれらは，ふたりで働くときには，ずっと早く行動する。案内人がまちがったときには，微小なしぐさによって後続者に合図し，どの方向に目を注ぐべきかを知らせる。前をいく者は，後続者が動物の足跡を発見したときには，ただちに，そっと後続者を見，ついで後続者の方向に従う。このようにして，両者がたがいに案内人となって探索は続く。ふたりともまちがった場合には，ひとりは木の下の，もっとも可能性の高い方向に速歩し，他のひとりは足跡の止まっている場所までもどり，さながら白イタチのように地面に鼻をつけ，こちらで木の葉を裏返し，あちらでてのひらに木の葉をのせてみて，動物のひづめによる微小なくぼみがないかと調べる。この間，かれはたえず注意力をじゅうぶんに働かせており，前をいく者のわずかなしぐさをもとらえようと構えている。何も見つからないときは，かれは，別の男が足跡を見つけたにちがいないと考えて，その方向に進む」

森のなかのひそやかな交信

「たがいに見えない状況になったときは，かれらは低い口笛によって交信する。それは，森のふつうの鳥が発する調子をまねた短い鈍い調子である。たがいに近いときには，かれらは肩より上にゆびをあげて合図する。緊急を要するときは，胸を1回または2回たたいてタンという音を響かせる。あるいは，注意をひくために，腰を軽くたたく。ひとりが後ろを見なくてはならなくなったときは，目の前に何があるかをまずとらえたのち，ゆっくりと後ろを振りかえり，何が起こるかを見る。あるいはまた，あとをついていく無器用な白人の，つぶやくような質問に答えるために，かれは振りかえる。その白人たるや，発射状態のままの銃を肩にのせ，小枝を折らぬように，あるいはまた，ツル科植物に足をとられぬように用心して歩き，それでも音と動きをなくすることができない無器用者なのである」

「もし小枝がきしんだとき，あるいは何かの音が生じたとき，ピグミーはただちに止まる。片足が宙にあるときは，そのままで，片足だけで立つ。その音の聞こえる距離にいる，いかなる動物も，その音がなんであるかを知るために，ひっそりと待つということを，ピグミーは知っているからである」

「ひとつの地点をさし示すためには，右手を顔のそばに寄せ，親指を折る。一方，左手を肩より上にあげて合図することもできる。動物が発見されたとき，小さな好人物は厳格となり，あとは銃の仕事となる。ピグミーの助けなくしては，狩猟家は森のなかで無力である。ピグミーの助けなくしては，かれは1頭の動物を見つけることもできず，出発点に帰ることもできないであろう」

クリスティ氏から58年おくれて，わたしは同じイツーリの森にピグミーをたずねた。もちろんわたしは，ある日，かれらの狩猟に同行させてもらった。そこでわたしが見たものをここに報告する。

部落総ぐるみの狩猟

ピグミーは，遠い遠い過去には，全体がひとつの共同体を，つまり民族を形成していたかもしれない。しかし，こんにちでは分散し，部族が最大の共同体であり，それがいくつもの氏族（クラン）に分かれている。1氏族が1キャンプを形づくるのが一般的であり，1氏族は100人前後の人員で構成されている。イツーリの森の東端のモンオヨに住むピグミーもまた約100人でキャンプを営んでいた。酋長はヌヘという名の37歳の男であった。

狩猟が単独，あるいは少人数でなされることはない。動物を追いたてる役と，これを待つ射手の2種の人数が必要であるからだ。20人以上の隊を組まなければ，有効な狩猟隊となることはできない。そのとき，女も子どもも，勢子の役割をもって狩猟に加わる。氏族の生存のためにすべての成員が不可欠の役割を果たすところに，この小さな共同体の強さがある。

森へはいる前に，わたしは10人のピグミー男子による競射を見た。わたしのガイドであるオカレは10メートルほど離れたところに立ち，巻きたばこを棒にはさんで標的とした。射手は次々に矢を放ち，1分とかからぬうちに巻きたばこは射ちおとされた。木登りして10メートルほどの高みにとまった少年が，木の上で巻きたばこの標的を差しだしたときも，射手たちはこれまた1分とたたぬうちにこの標的に命中させた。これは客であるわたしを喜ばせるための行事であると同時に，かれら自身のウォーミングアップでもあった。

狩猟地の入り口まで進んだとき，20人の射手と20人の勢子がそろっていた。女と子どもたちは草を刈り，その草で勢子の棒をつくった。一方，男たちは鉄の矢じりをとぎ，弓矢をあらためて点検した。ひとりの男は木の棒に鉄の先端をつけた長さ2メートルほどの槍をもっていた。弓矢だけでしとめることのできない大型動物が現われたとき，この槍で攻撃するのである。事実，ゾウ狩りにこの槍は必須のものであり，ゾウをしとめたときの『ゾウを葬送する歌』（本稿の㊤で紹介）のなかには，槍を語るくだりがあ

る。しかし，このモンオヨの森には大型動物はほとんど見当たらず，主たる獲物はアンテロープである。わたしは動物学者ではないので，アンテロープについて詳しく述べることはできない（それにこの『世界動物百科』の47〜49号でガゼルとアンテロープを扱っているので，ガゼルを含むアンテロープそのものについては，それを参照されたい）。ただ，要約的にいえることは，アンテロープが多様であり，小は肩高25センチ，大は肩高180センチに及ぶということである。アンテロープはカモシカと記されることが多いので，わたし自身も，つののある，すらりとしたあしをもつ動物を期待していた。しかし，モンオヨのアンテロープは，つののない，肩高50センチに達しない，あしの短い動物であることをわたしは知ることとなった。

幹にさわり，においをかぐ

はじめに，勢子が森のなかへはいった。ついで，射手がはいった。はいるまえに，酋長は6人を責任射手として指名していた。そのなかのひとり，バハナはわたしの案内人でもあった。バハナのしぐさは，クリスティ氏があの報告のなかで話しているとおりであった。

かれはゆっくりと進んだ。靴をはいているわたしの足音は響き，はだしのバハナの足音はまったく聞こえなかった。カメラのシャッターを切るとき，それは異様な騒音のように思われた。バハナにとって，この音はじゃまであるにちがいなかった。それに，森のなかの暗さが，カメラを使用不能にしていた。そこで，わたしは，カメラをからだにしばりつけ，木の根を踏まぬよう，枝にぶつからぬよう，用心しつつ歩いた。バハナはわたしがぶつかりそうな枝があると，それを静かに押しあげてわたしの通るのを助けた。枝を押しあげるしぐさもきわめて静かであった。

バハナはもちろん，第1に地面の足跡に注意していた。次に，かれは木の幹をときどきじっと見つめ，さわったり，においをかいだりした。この動作は，クリスティ氏が描かなかったものである。このバハナのしぐさは，動物が木の幹をかじったとか，木の幹にからだをこすりつけたとかの行動の跡を探りだし，それが新しいか古いか，走った方向はどこか，を知るためのものであった。バハナはまた，ときどき立ちどまって耳をすませた。遠巻きにした勢子の，地面をたたく音のなかで，バハナは穴から飛びだして走るかもしれぬアンテロープの音に，いやそれより先に，穴のなかでうごめくかもしれぬアンテロープを探知しようとしているのであった。


吠えない猟犬に木鈴をつける
左手にはめているのは 動物の内臓でつくった弓の反動を防ぐプロテクターである

バハナはウブという名の猟犬をしたがえていた。モンオヨのキャンプは3頭の猟犬をもっている。1頭は酋長のものであり，バハナともうひとりの男が1頭ずつもっている。

ピグミーとイヌとの関係は，ピグミーと鉄との関係より古いにちがいない。ピグミーはイヌについて，次のような物語をもっている……。

むかし，むかしの，そのむかし，人間と動物が同じ村にすんでいた。ある日，トラが大いなる飢えを覚えた。トラは人家に押しいり，母に抱かれている赤ん坊を奪い，骨まで食べつくした。母は村長に訴えた。村長はトラを呼びつけた。トラは，赤ん坊を食べたことはない，その赤ん坊は森のなかで行方不明になったのだろう，と答えた。

イヌが村長のところへ現われた。イヌは，女の家で骨をしゃぶって遊んでいるときに，トラが赤ん坊を奪い去ったのを見た，といった。村長はイヌの証言を採用した。

「トラの子と人間の子は今後戦わねばならない。人間はトラの敵となるだろう。イヌは人間を助けるだろう」と村長はいった。そのときから，人間とトラの戦いが始まった。

村長はサルを呼んだ。サルは行儀が悪く，ウソをついた。村長はサルを村から追放した。そのときから，人間はサルの皮で衣類をつくり，その肉を食用にし，子ザルを村の見せ物とするようになった。

村長はイヌを呼んだ。「お前はあのとき骨と遊んでいて，トラから女と赤ん坊を守ろうとしなかった。今後おまえは人間の奴隷となるだろう。おまえは女と家の番をするだろう」。村長はイヌにそういい渡した……。

なぜか猟犬は吠えない

これは，ガボンのピグミーがもっている物語として，トリーユ神父が報告しているものである。この物語のイヌは，明らかに戦闘的ではなく，吠えることしかしなかったであろう。わたし自身がモンオヨのキャンプでみた3頭のイヌもまた戦闘的ではなく，吠えることさえ知らないのであった。いずれもベージュ色で，柔和な顔をした中型犬であった。


しとめたアンテロープを手ぎわよく解体する

なぜ吠えないのか。わたしにはわからない。ガイドのオカレに聞いてみても「むかしからそうです」という答えを得ただけであった。イヌが吠えないので，ピグミーは狩猟に出るときには，くびに，木でつくった鈴をつける。

バハナはときどき，盛りあがった木の根や，小枝が重なりあっているところや，穴のあいている場所を見つけると，イヌのウブを走らせた。ウブが走ると，木鈴がカラカラと音を立てた。イヌの接近と，このカラカラという音が，攻撃を避けて潜んでいるアンテロープを走らせるのである。

狩猟中に動物の名を口にしないというのはピグミーの習慣である。ねらう動物は，その名が呼ばれると，じゅうぶんに警戒して，走りださない，というのがピグミーの考え方である。ここにも，ピグミーにとっての動物の特殊な位置があらわれている。

わたしの同行した狩猟の際，効果のない行動がかなりの間つづいたのち，遠くで勢子の喚声があがった。ガイドのオカレは「アンテロープが走ったと知らせているのです」とわたしに教えてくれた。しかし，実際には，勢子の叫びに動物名ははいっていないのであった。彼女らはただ「走った」とか「見えた」とかいっているだけなのであった。バハナはといえば，この勢子の声が聞こえたあと，射撃姿勢をとり，わたしの耳もとに口を寄せて，低い声で「アンテロープ」といった。狩猟中に，わたしがピグミーから動物名を聞いた，これが唯一の例であった。しかし，バハナはそのとき禁を犯しているのではなかった。なぜなら，「アンテロープ」とはかれらにとっては外国語であり，したがってモンオヨのアンテロープにとっては外国語であったからだ。ピグミーのことばでは，アンテロープのことを「メディ」と呼ぶのである。外国語で，低い声で，その名を口にしたとしても，それは狩猟の妨害になるはずはないのであった。

動物の行動学を知っているピグミーは，もちろん個々の動物の肉体的構造をよく知っている。動物のどこが弱点であるかを知っている。ゾウの場合，それはあしの腱であり，くびの延髄である。ピグミーは弓と矢と槍をとってゾウに迫る。ゾウの走る道の木の上で待ちかまえたピグミーが，槍で延髄を刺す場面は，イツーリの森の中央部ではいまも見られるのである。アンテロープはどうかといえば，そのあとあしのものつけ根が急所である。射たれたアンテロープは50メートル以上は走りつづけることはできない。わたしの見た狩猟の際，射とめられた3頭のアンテロープはすべてあとあしのものつけ根を射たれていた。もちろん，わたしはピグミーの弓の能力を神秘化するものではない。このような命中度は10メートルないし20メートルの距離で達成される。ピグミーはその距離に近づくまでチャンスを待つ。そのために多くの勢子と多くの射手が共同に働かねばならないのである。もっとも，樹上に休んでいるサルを射つ場合には，50メートルの距離であっても，ピグミーは高い命中度を示すことができる。

わたしは本稿の㊤と㊥でピグミーと動物との関係を，内面と外面から概観した。次の最終回では，未開社会における人間と動物の関係としてつねに問題となるトーテミズムに目を向けてみようと思う。■



跳躍力のすぐれたサキは
現地の人たちから
“宙をとぶサル”と呼ばれていた

アマゾン動物記 14

伊沢紘生

澄んだ歌声

≪いちばん好きな声≫

ここ数日，それまできまってたたきつけていた昼下がりのきつい スコールはなく，1日じゅう雲の高い晴れた日が続いた。キャンプから西へ500メートルほどいった観察路のわきにあるグアモの大木には，豆状の実がいっぱいに実り，クロクビタマリンの群れと，1頭の雄のサキがほとんど毎日この実を食べにやってきた。3頭のクビワペッカリーもサルたちの落とした実を拾いに毎朝ここへ通ってきた。

わたしはこの日も助手のホボといっしょに朝キャンプを出て，グアモの木にやってきていたタマリンの群れとサキを観察し，そこから北西に向かって切り開いてある観察路に沿って歩き，大木を倒して小川にかけてある丸木の橋を渡った。

小川の縁の日だまりで休んでいた小型のワニがあわてて水のなかへとび込んでもぐった。明るい褐色（かっしょく）をした大きなオリオンタテハが2匹足元から垂直に舞いあがった。森のなかは静かだった。わたしたちは丸木の橋を渡った先で一服した。タバコに火をつけ，半分ぐらいまで吸ったとき，前方，小川に沿った暗い感じの低湿林の茂みの奥から「ホッホッホッホッホッ」，「ホッホッ・ホィーホッホッ」，「ホィー・ホッホッホッ」というサキのまろやかな鳴きかわしが聞こえてきた。

サキの声はホエザルの声の大きさにはとうてい及ばない。またウーリーモンキーのような人なつっこいにぎやかさもないし，クロクビタマリンのかん高い金属的な響きをもった気ぜわしげな声とも違う。それは高い，澄んだ声であり，心地よい軽やかさをもっていた。もしアマゾンの森林で聞かれるありとあらゆるけものや鳥の鳴き声のなかで，いちばん好きな鳴き声は何かと聞かれたら，わたしはなんのためらいもなくこのサキの声だと答えるだろう。サキはとくにオトナの雄になるとのどのところにわりあい大きくふくらむ鳴きぶくろを持っていて，鳴くときそのふくろをふくらませ，声を共鳴させている。

わたしはなおしばらくそのままサキの歌声に聞きほれていた。少しの間を置いてサキは4回鳴いた。

ホボはそのあと，口笛で器用にやつの鳴き声をまねた。しかし口笛が届かなかったのか，そのときは応答がなかった。ホボは続けて左手の親指と人さし指で輪を結んで口のなかへ入れ，ウーリーモンキーの鳴き声をまねた。サキはウーリーとよくいっしょにいて，ウーリーの鳴きまねにもすでに一度応答したことがあったからである。

「チュルッ・チュルッ・チュルッ」

サキの声のあったよりもう少し遠くから，今度はウーリーの応答があった。しめた！　この地域でウーリーの群れといっしょにいるのはサキの2頭の群れにまちがいない。

≪サキのふたつの群れ≫

これまでの調査で，わたしが設定した10平方キロメートル余りの調査地域内には，サキの，オトナの雄と雌の2頭の群れと，オトナの雄と雌，若い雄，それにひとり立ちしているコドモが2頭，アカンボウが1頭の計6頭の群れが出入りしていることがわかっていた。このほかにキャンプの近くのグアモの木にしばしばやってきていた1頭だけで行動しているオトナの雄がいた。

そして，2頭の群れは調査地域のより南側をおもに遊動していて，多くの場合，ウーリーモンキーの40頭余りの群れといっしょにいた。一方，6頭の群れは逆により北側をおもに遊動していてクロクビタマリンの群れといっしょにいることが多く，またウーリーの群れが北のほうへ移動したとき，ときどきいっしょに採食することがあった。

サキのこのふたつの群れの遊動域は約4平方キロずつで，遊動域のかなりの面積が重なりあっていたが，おのおのはたがいに他の群れを避けあって行動していた。また1頭の雄はふたつの群れの遊動域が重なりあっている地域にいることが多かった。ただこの1頭の雄も，ふたつの群れのおのおのへの接近を巧みに避けるように行動していた。

わたしたちは2度，この3者を調査地域内で同時に観察したが，3者のあいだの距離はいずれの場合にも1キロ前後隔たっており，そのとき，おたがいが接近しあう方向へ移動していくということはなかった。他の種類のサルとはしばしば混群をつくるのに同じ種のあいだでは群れあるいは個体どうしがなわ張りをもつか，このように明確ななわ張りをもたなくてもたがいに接触あるいは極度に接近することを避けあいながら生活しているといった現象は，サキに限らず，熱帯の森林にすむサルの社会ではそれほど珍しいことではない。

≪ウーリーといっしょにいた≫

わたしたちは少し先で観察路をそれ右手の低湿林のかなり深い茂みへとはいっていった。観察路をそれると，いくらゆっくり歩いても，どうしても森の下ばえをがさつかせてしまい，サルたちに警戒心を起こさせてしまうことが多かった。

ウーリーモンキーは，そこのカイモの大木に集まって採食していたが，わたしがやつらを木々の茂み越しに確認するより早く，1本手前の木にいた1頭の大きなウーリーが「コルッ」「コルッ」というきつい警戒音を発し，それを合図に他のウーリーたちはバサバサと大木の枝伝いに奥の茂みへと逃げはじめた。わたしは逃げていくウーリーを13頭まで数えた。うち2頭のオトナの雌の背中にはかわいらしいアカンボウが背負われていた。

と，ウーリーが移動していった枝の向こう側の，ほぼ水平にのびた太い枝を，黒いサルが首をすくめたような格好で，太いフサフサとした尾をひきずるようにしながら小走りに走り抜けた。やつはその枝先から3メートルばかり宙をとんで隣の木の茂みにのめり込んだ。つづいてもう1頭，先のやつよりやや小柄なサルが同じ枝を走り抜けて宙をとんだ。やはり予期したとおり2頭のサキはウーリーモンキーの群れといっしょにいた。

わたしはその後も何回かこのウーリーの群れとサキの群れがいっしょに行動しているのを観察したし，1本の木で採食しているのも見た。しかしウーリーとサキがおたがいにまったく無関心でいるのか，複雑な社会関係を保って生活しているのかを詳しく調査することはできなかった。

サキはおもに木の実や木の葉を食べている。もうひとつサキが好んで食べているものに樹上性のアリがある。アマゾンの森林を歩くと木々の枝につくられた大きなアリの巣が非常にたくさん目につくし，しかもたいていの木にはアリがいっぱいたかっている。その点，サキは好物にとり囲まれて生活しているといえるだろう。

≪宙をとぶサル≫

わたしの観察したサキはマンクサキ（*Pithecia monachus*）と呼ばれる種類で遠くから見ると黒っぽく見えるが，よく見ると黒いあらい深々とした毛に白がゴマ塩のように混じっている。そして憂いを含んだ顔は額からたれ下がった黒い毛にうずもれて，見る人に陰気な印象を与える。そこからサキは悪魔ザルと呼ばれることもあるが，現地人はふつうボラドールと呼んでいた。ボラドールはボラール，宙をとぶという動詞に由来する。非常に跳躍力のすぐれたサルであることから，宙をとぶサルと呼ばれるようになったのだと思われる。またサキということばは，アマゾン中流域の原住民が小型のサルを呼ぶのに使っていたサギという土語が語源である。

サキ亜科（*Pithecinae*）には，サキ属（*Pithecia*），ヒゲサキ属（*Chiropotes*），ウアカリ属（*Cacajao*）で計5種のサルたちがおり，これらのサルたちはアマゾン流域からオリノコ流域にかけて生息している。わたしたちが調査してまわった地域にはサキ亜科のサルはマンクサキ1種しか生息していなかったが，プトマヨ河およびカケタ河をコロンビアとブラジルの国境近くまで下ると，そこにはアカウアカリ（*Cacajao rubicundus*）がすんでいる。アカウアカリは頭がすっかりはげ上がり，顔も頭もピンクがかった赤色をし，フサフサした長い体毛は褐色がかった赤色で，その憂いを帯びた表情からは東南アジアのオランウータンを連想させる。ただこのサルの野生状態での生態はまだほとんどわかっていない。■



シギ科　*Scolopacidae*

シギ科の鳥は，チドリ目のチドリ亜目に属し，おもに次のふたつの点でチドリ科の鳥と区別される。

ひとつはくちばしの長さで，2，3の例外はあるがふつう頭部より長い。その形はまっすぐな場合もあれば，上下に曲がっていることもある。もうひとつは，チドリ科の鳥は一般に後趾（こうし）が退化して，あしゆびが3本しかついていないが，シギ科の鳥の場合は4本ある（ミユビシギは例外）ことである。

シギ類とチドリ類の違いは形態的なものだけではなく，その動作，とくにえさを食べるときの動作にもよくあらわれる。シギの仲間は，頭を下げたまま，くちばしをどろや水中に入れて続けざまにえさを食べる。一方，チドリの仲間は何メートルか走り，ひとつえさを拾うと頭を上げ，ちょっと立ちどまってまた走り，別のえさを拾う。だからシギ科の鳥は，チドリ類よりずっと落ちついているように見える。

シギ科の鳥の外形的特徴をまとめると，だいたい次のようになる。

●全長は13～70センチで，一般にチドリ類より大きい。

●羽色（うしょく）は雌雄だいたい同じだが，繁殖期（夏羽）と秋（冬羽）とではふつう著しく異なる〔本文の羽色の記述で，とくに夏羽，冬羽の断わりがないものは，成鳥の夏羽のことである〕。

●体形はほっそりして，くびが長く，頭部が比較的小さい。

●くちばしが長く，その先は，チドリ類のようにふくらんでいない。

●あしが長く，あしゆびは4本ある。

現在まで知られているものは約80種で，全世界に分布し，一般に渡り鳥である。生息地は湿潤な地帯，つまりツンドラ，沼地，湖畔，池畔，海岸などで，水底のどろのなかから，水生の小さな無脊椎（むせきつい）動物――貝類やミミズ類，エビ，カニなどを捜しだして食べる。しかし小型のシギ類は，水生の昆虫（こんちゅう）とその幼虫を主食にしている。

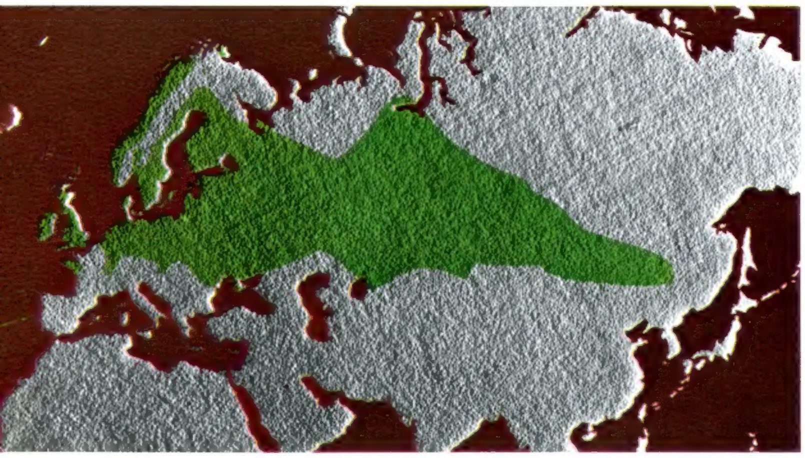
オオソリハシシギ。シギ科オグロシギ属。
夏羽と冬羽のものとが入りまじっている。
前から3番めの鳥はオグロシギで
両種は羽色，習性ともによく似ており
いっしょに群れて暮らしていることも多い。
撮影　高野伸二



ダイシャクシギ

Numenius arquata

ダイシャクシギ（ダイシャクシギ属）は，全長が約52～65センチ，体重が650～1100グラムの大型の鳥で，雌は雄よりも大きい。つばさを開くと1メートル近くにまでなる。くちばしは細くて非常に長く，雌では14～19センチもあり，下に少し弓なりに曲がっている。



ダイシャクシギの繁殖地。
ユーラシア大陸の亜寒帯地方で繁殖し
開けた湿地，湿気の多い草原や牧草地
沼のほとり，水たまりの多い丘陵地帯にすむ。
冬はアフリカ，インド，東南アジアで越冬する。

ダイシャクシギは漢字で“大杓鷸”と書き，くちばしの大きなシギを意味する。

羽色は，雌雄ともに同じである。からだの上面は黒褐色の地に淡黄褐色の縞模様があり，下面はクリーム色に，不明瞭な濃褐色の縦縞がある。腰は白い。あしは鉛色で，前に向いたゆびのあいだには小さなみずかきがついている。

食べ物は，カニ，エビ，小魚，貝類，ゴカイ，その他土中の無脊椎動物などで，長いくちばしでどろのなかや腐植土のなかを突っつきまわしながら捕える。昆虫もかなり食べるが，からだの大きいこの鳥の主食は，カニ，エビと貝類である。

ダイシャクシギは，大股で歩くにもかかわらず，その動作は非常に軽快で優美でさえある。また，必要があれば走ることもでき，泳ぐこともなかなかうまい。飛び方はあまり速いとはいえないが，力強く羽ばたいてなめらかに飛ぶ。着陸するときは一瞬滑空し，それからつばさを閉じ，地面に向かって直進し，接地直前に尾羽（おばね）をひろげ，両翼を羽ばたきブレーキをかけておりたつ。

鳴き声は，よく響く大きな声で，語頭にアクセントのある「クーリュー」とか，語尾を上げる「クーリューイ」とか，その他いろいろに聞こえる。繁殖中にも渡りのときにもよく鳴き，とくに繁殖期には，書き表わすことはとてもできないが，非常にメロディアスなさえずりも聞かせてくれる。

ダイシャクシギは渡り鳥である。繁殖地はユーラシア大陸の亜寒帯地方で，ヨーロッパの中部および北部から，バイカル湖や中国東北部まで及び，冬にはアフリカ，インド，アジアの南部に渡り，越冬する。日本では繁殖しないが，シベリアとアジア南部のあいだを往復する途中の春と秋の2回に，干潟や河口などで見かけられ，本州中部以南では越冬するものもある。群れをつくる習性が強いが，他のシギ類が，ほかの種といっしょにいるのにくらべると，自分たちの仲間だけの群れでいる傾向があるようだ。

一押し二押しのディスプレー

ヨーロッパの繁殖地には，3月の終りころまでに渡来し，すぐにつがいができる。つがいになるときのようすだが，雄は繁殖地に到着すると1日じゅう，ときには夜にまでさえ

ダイシャクシギ。シギ科ダイシャクシギ属。
その巣は，ずいぶん簡単なつくりだ。
抱卵やひなの世話は，雌雄が協力して行なうが
南へ渡る時期になると，ひなの世話を雄にまかせ
雌がまっ先に飛び去ってしまうこともある。
PH. OPERA MUNDI

ずる。ディスプレーの間にも，ふつうの飛行中にも，地上にいるときにもさえずりつづける。ディスプレーのときには，上空30メートルくらいまで，ほとんど垂直に舞いあがり，笛を吹くような声で歌う。空中では，いろいろな曲芸を見せることもある。やがて，よく響く，ふるえるような調子でさえずりながらゆっくり滑空して降りてくる。このとき，地面に降り立たずにまた舞いあがり，ディスプレーを繰り返すこともある。

一方雌は，地上で，これまた歌いながら雄を待っている。雄が地上に舞いおりると，雌はゆっくり歩きだす。すると雄もぴったり雌のあとにつき，くびをひっこめ，背を丸めてついていく。雌が立ちどまると，雄は頭を振り振り，つばさをたれたまま，雌のまわりを歩きまわる。そこで雌はまわれ右してまた歩きだす。雄はあい変わらず雌のあとにつき従い，人間から見れば〝どうかこの気持ちをわかってください〟と哀願するようなようすをする。こうしたことを繰り返したあとで，雌が雄を受け入れるとつがいができあがるのである。

つがいはみな，自分たちのテリトリー（なわ張り）をもつわけだが，多くの小鳥たちのように広い場所をひとり占めにすることはない。ふつう，巣を中心に50メートルからせいぜい 200 メートルくらいの範囲である。

巣はまったく簡単なもので，かわいた地面にごく浅い凹みをつくり，そこに枯れ草や小枝を敷きこんだだけのものである。巣は多くの場合，毎年だいたい同じところにつくるようだ。産卵期はたいてい４月の末から５月にかけてで，１腹の卵数はふつう３，４個で，まれに６個のこともある。卵は洋梨型をしており，色は土色に近く，灰色と暗褐色の斑紋がある。雌雄交替で，26～30日間抱卵（ほうらん）する。

卵からかえったひなたちは，羽毛（うもう）がかわくとすぐに親鳥に引き連れられて巣を離れる。親が急を知らせると，ひなはさっと身を隠し，危険が去るまではじっとして動かない。それは徹底したもので，たとえ踏みつぶされようとも，身動きひとつしないのである。だから，ひなを見つけるのは非常にむつかしい。

親鳥がひなたちに示す愛着はたいへんなものである。ダイシャクシギはふつう，警戒心が強く，臆病な鳥で，人間の姿を見るといち早く逃げるが，この時期には非常に勇敢なところを見せる。

たとえば，つがいの片方が卵を抱き，もう一方が巣から少し離れて見張りをしているところへ人間が現われたとする。すると見張りのほうは，ただちに巣と反対方向へ走りだし，しばらく走ってからパッと飛びたち，注意をそらすために侵入者の手前数歩のところへ突然立ちはだかる。また，敵を巣からできるだけ引き離すため，へたな擬傷をやって見せることもある。一方，抱卵していたほうは，その間，卵の上にぴったりと伏せて身じろぎもせずにいる。こうすると，羽色が地面の色とすっかりひとつになってしまって，巣のあることが気づかれずにすむのである。

また，カラスやノスリ，イヌ，キツネなどが卵やひなを略奪にくると，その辺一帯に巣をつくっているダイシャクシギが１羽残らず飛びだしてきて，闖入者に襲いかかり，攻めたてて退散させてしまう。

ひなは孵化してから５，６週間で飛べるようになり，早いものは，６月末にはもう独立していく。

繁殖期には，開けた湿地，湿気の多い草原や牧草地，沼地のほとり，水たまりの多い丘陵地帯にすんでいる。冬や渡りの間は，小さな群れをつくり，砂浜で暮らしていることが多い。



ホウロクシギ。シギ科ダイシャクシギ属。
学名を見るとマダガスカル島産のように思えるが
そこではまだ，１回も発見されたことがない。
日本で見られるシギ類では最大の鳥で
春と秋の渡りの途中に立ち寄る。

撮影　柳澤紀夫

ホウロクシギ *Numenius madagascariensis*（ダイシャクシギ属）は，形，羽色，大きさともにダイシャクシギによく似ているが，からだの色は全体に赤みが強く，また，腰が背中と同じ色で白くない。全長が53～68センチ，くちばしの長さは14～20センチほどで，日本に渡来するシギ類のなかでは最大の種である。鳴き声もダイシャクシギに似ている。

アジアの特産種で，カムチャツカ，シベリア東部，沿海州，モンゴルあたりまでに繁殖し，冬にはフィリピン，モルッカ諸島，ニューギニア，オーストラリアにまで渡る。日本には，渡りの途中に立ち寄るだけだが，その個体数はダイシャクシギよりはいくらか多いようだ。

すみ場所や食べ物もダイシャクシギと同じで，おもに干拓地や河口のどろの多い干潟でえさをあさる。

繁殖期には，湿地や河口の湿った原野，沼沢地の周囲の草原にすみ，かわいた地面の上にダイシャクシギと同じような巣をつくる。シベリアでの産卵期は６月ころである。７月の末から８月の半ばころには繁殖を終わり，10～40羽の群れをつくって渡りを始める。



チュウシャクシギ

Numenius phaeopus

チュウシャクシギ（ダイシャクシギ属）は，ダイシャクシギに似ているが，ずっと小型である。全長が45センチをこえることはほとんどなく，つばさを開くと75センチくらい，体重は400グラムにすぎない。それに，頭の上と眉の部分がクリーム色ではっきりしていることでも，ダイシャクシギと区別できる。くちばしは長いが，ダイシャクシギのものよりは短く，7.5～9センチで，曲がりぐあいも少し深い。和名は漢字で"中杓鷸"と書くが，これはくちばしが中くらいの長さであることを意味する。

チュウシャクシギの気性は，ダイシャクシギと非常に異なっている。というのは，ダイシャクシギが警戒心が強いのに対して，チュウシャクシギは人をあまり恐れない。驚かされたりすると，いったん飛び去るけれども，すぐまたもとの場所にもどってくる。鳴き声も独特の調子で「ポッ，ポッ，ポッ，ポッ，ポッ，ポッ」と6，7声続けて鳴き，鳴き声だけででもチュウシャクシギと判定できるほど特徴がある。

ヨーロッパ北部，アイスランド，スコットランド，ノルウェー，フィンランド，ラップランドおよびソ連北部，シベリア，アラスカとカナダのツンドラなどで繁殖し，冬にはアフリカ，アジアの南部，オーストラリアなどに渡る。日本には，この渡りの途中，春と秋とに渡来するだけだが，その時期には，海岸や河口部，海岸近くのたんぼなどでふつうに見かけられる。

この鳥がもっとも頻繁に現われる場所は，海岸の干潟や川原の砂礫地で，また岩の多い岸べや堤防の上などでも，よく休んでいる。内陸の草地や畑などは好まないようだ。

食べ物は，ダイシャクシギとだいたい同じだが，からだやくちばしが小さいから，捕えるえさも少し小型のもので，しかも比較的どろの浅いところや砂浜であさっているようだ。渡りの最中には，海岸近くのちょっとしたくさむらのなかでえさを捜していることもよくある。

巣はツンドラの低い草のなかにつくる。よくかわいた地上にあって，ダイシャクシギの巣によく似ている。卵は茶色の地にセピア色の斑点があり，1腹の卵数はふつう4個である。抱卵期間は約24日，雌雄が交替であたる。産卵は5月ころで，7月の末には繁殖が終わり，再び家族たちが集まって群れの生活を始める。

コシャクシギ *Numenius minutus* は，ダイシャクシギ属のなかでいちばん小型の鳥で，全長が約33センチ，くちばしの長さは4.2～5センチほどである。外観と羽色はチュウシャクシギに似ている。

シベリアの中部と東部，バイカル湖の近辺，沿海州などで繁殖し，冬にはフィリピン，モルッカ諸島，オーストラリアに渡る。おもに中国の沿岸にそって渡り，日本にもやってくるが，その数は非常に少ない。

繁殖地では比較的乾燥した草原や林の周辺に好んですんでいる。繁殖習性は，チュウシャクシギとほぼ同じ。シベリアでの産卵は6月ころ。

エスキモーコシャクシギ *Numenius borealis*（ダイシャクシギ属）は，コシャクシギに非常によく似た，大きさも同じくらいの鳥である。人によっては，この2種を同一の種に分類している。この鳥は，かつてはかなりたくさんいたようだが，1870年から1880年の間に急激に減少し，現在では絶滅に近いことで著名である。

繁殖地はカナダ北西部で，冬は南アメリカにまで渡る。産卵期は6月から7月のはじめころまでである。

日本では，以上に述べたほかに，**シロハラチュウシャクシギ** *Numenius tenuirostris* と**ハリモモチュウシャクシギ** *N.tahitiensis* の2種も，迷鳥として捕獲されたことがある。

チュウシャクシギ。シギ科ダイシャクシギ属。
飛びあがるときや飛んでいるときに
「ポッ，ポッ，ポッ，ポッ，ポッ，ポッ，ポッ」
と，口笛に似た声で6，7声つづけて鳴くので
Seven whistler（7回口笛を吹く者）とも呼ばれる。
撮影　水野仲彦

コシャクシギ。シギ科ダイシャクシギ属。
シベリアの中部や東部，バイカル湖などで繁殖し
冬はオーストラリアにまで渡るが
中国大陸がおもな渡りの経路になるため
日本に立ち寄るものは非常に少ない。（右）
提供　北九州野鳥の会





オグロシギ　*Limosa limosa*

オグロシギ（オグロシギ属）は，全長が35〜42センチ，体重が230〜340グラムで，シギの仲間では中型の鳥である。雌は雄よりやや大きい。長いくちばし（7〜9センチ）をもっているが，その曲がり方は，ダイシャクシギ属の鳥のように下方にではなく，ほんのわずか上にそりぎみで，先端がやや太くなっている。

羽色は，繁殖期（夏羽）には背中が暗褐色で，赤褐色と黒色の模様があり，頭部と頸部（けいぶ），胸部は赤錆色，腹部は白く，胸から腹にかけて黒い横縞がある。上尾筒（じょうびとう）と尾の基部は白色だが，尾羽の先半分は黒い。秋（冬羽）になると，頭部，頸部，胸部はくすんだ灰色に，また背中の模様は灰白色になり，胸から腹にかけての黒い縞模様もなくなる。飛ぶと，大きな白い翼帯（よくたい）が見え，尾羽の黒と白があらわれる。このためオグロシギ（尾黒鷸）といわれるのだが，この部分は休止しているときには，つばさの先端でほとんどおおわれていて見えない。

オグロシギは，北半球の温帯，亜寒帯地方で繁殖するシギ類の例にもれず渡り鳥である。ヨーロッパ北部（アイスランド，イギリス，オランダ，デンマーク，バルト海の沿岸地方），ヨーロッパ東部からシベリア南部，沿海州，カムチャツカまでのユーラシア大陸の亜寒帯地方で繁殖し，冬には地中海地方，アフリカ，インド，東南アジア，ニューギニア，オーストラリアなどに渡る。日本では旅鳥で，春と秋に渡来するが，その数はあまり多くないようだ。渡りは春なら4，5月に，秋なら8月末から9月にかけて行なわれる。

繁殖期には，牧草地や海岸，河口近くの草のおい茂った湿地や森林限界近くの湖沼地帯にすんでいる。そして，ふつうかたい砂地より，どろの多いところを選んですみつくようだ。渡りの間は，干潟や干拓地，塩田で日中を過ごし，夜に旅行を続ける。

食べ物は，おもに昆虫とその幼虫，ミミズ，小型の貝類，エビやカニなどである。もちまえの長いくちばしをどろのなかに突っこんで引っかきまわし，えさを探りあてるとそのまま吸いこむようにのみこむ。しばしば水中に腹までつかりながら，えさをあさっている姿が見られる。

飛び方は力強く，しかもなめらかで，ときおり，短い滑空飛行をまじえる。歩き方は，ゆっくりとして落ちついた足どりである。泳ぎはやむをえない場合のほかはめったにやらない。

オグロシギも繁殖期を過ぎると群れをつくるが，単独で生活していることも多く，群れをなしている場合でも大群でいることはほとんどない。ふつうは，30羽以下の小さな群れで暮らしている。だいたいが静かな鳥で，飛びたつときに「クイッ，クイッ」というきしんだようなあまり特徴のない声をだす。しかし，繁殖期にはかなり複雑なさえずりを聞かせ，他のシギ類と同じようなディスプレーも見せる。

ヨーロッパでは4月のはじめに，つがいになったオグロシギが繁殖地にやってくる。そこはたいてい，かなり広い，草がおい茂った水の浅い泥地である。つがいはテリトリーをつくるが，その範囲は広くはなく，かなり狭い場所にかたまって繁殖する点は，他のシギ類と同じである。タゲリといっしょに繁殖しているところさえある。

営巣（えいそう）場所が決まるとすぐ，雄はディスプレーを始める。上空50メートルくらいまで垂直に舞いあがり，弧を描きながら旋律の美しい歌をうたい，しばらくの間舞いつづける。そして，最後に地上めがけて矢のように落ちてくるが，地面すれすれのところ

オグロシギ，シギ科オグロシギ属
属名は《沼地を好む》の意味である
この長いくちばしでどろのなかを引っかきまわし
獲物を探りあてると吸いこむように飲みこむ
写真はさしずめ“考える鳥”といったところか
PH. A. J. DEANE BRUCE COLEMAN LTD





でさっと身をかわし水平状態にもどる。また，地上では，雄が雌の前で尾羽をひろげ，おじぎをしているようなようすを見せる。そうしたディスプレーの繰り返しの間に，しばしば雌雄そろって飛ぶが，そのときは，雄は雌の少しあとからぴったりついていく。こうしたディスプレーの時期が終わると，すぐに交尾が行なわれる。

巣はスゲの茂みや湿気の少ない牧草地のなかにあり，地面につくった凹みに，枯れた草木の茎や細い根が敷きこんである。5月に4個の卵を産むが，卵は緑っぽい色で，褐色や灰色の斑紋がついている。抱卵は雌雄交替で約24日間続けられる。その間に侵入者でも現われようものなら，ひどく落ちつきをなくして羽をばたつかせはじめ，断続的に心配そうな鳴き声をたてる。侵入者がさらに巣に近づいてくると，親鳥は気違いのようになって突っつきかかり，牽制攻撃をかけ，敵の目を巣からそらせようとする。

卵からかえったひなたちは，全身綿毛に包まれている。綿毛の羽色は茶褐色で，黒い斑点がある。1か月もたつと，ひなは自活できるようになって独立していき，親鳥たちは再び，つがい水入らずのつつましい物静かな生活にもどる。

オオソリハシシギ

Limosa lapponica

オオソリハシシギ（オグロシギ属）は，オグロシギよりいくらか大きな鳥である。全長が38～44センチで，体重は雌の大きいものになると430グラムを越える。繁殖期（夏羽）と秋（冬羽）の羽色は，ともにオグロシギに似ているが，からだが比較的大きくてあしが短く，くちばしがはっきりわかるほど上にそっているので見分けがつく。

オオソリハシシギの繁殖地は，オグロシギよりずっと北の地方で，おもにユーラシア大陸とアラスカの北極圏である。冬には地中海の沿岸，アフリカ，東南アジア，オーストラリアなどに渡る。日本では，オグロシギと同様旅鳥だが，その渡来数はずっと多い。

繁殖期には，ツンドラの湿気の多い草原や沼沢地の周辺にすんでいる。産卵期は，ヨーロッパの北の地方で6月ころである。渡りのあいだはもっぱら海岸や河口にいて，干潟の砂浜や泥地を落ちついた足どりで歩きまわり，その長いくちばしでどろのなかにすむいろいろな小動物をあさっている。ゴカイ，ミミズ，貝類，甲殻類，昆虫とその幼虫などがそのおもな食べ物だが，とくにカニが好物のようである。

習性もオグロシギにたいへんよく似ているが，オオソリハシシギのほうが人を恐れず，にぎやかで，ときには非常に大きな群れで生活していることもある。飛行中に「カッ，カッ」という声で鳴く。

オオソリハシシギ。シギ科オグロシギ属。
日本では，春秋の渡りのときたくさん見られる。
飛びながらよく「カッ，カッ」という鳴き声を出す。
しばしば大きな群れで暮らしている。
水辺を漫歩し〝しばし孤独を楽しむ〟の心境か。
撮影　竹丸勝朗

アカアシシギ　*Tringa totanus*

アカアシシギはクサシギ属に属するが，この属の鳥は，みなすらりとしたからだつきと細いくび，非常に長いあし，まっすぐで先細のくちばしなどで見分けられる。

アカアシシギは全長が26～29センチ，体重が約130グラムで，羽色は頭部と背中が黒褐色で淡赤褐色の斑点があり，腹側と上尾筒は白いが，のどから腹にかけて黒褐色の縦縞模様が見られる。尾羽は，黒褐色と白の横縞模様になっている。その長いあしは，アカアシシギ（赤足鷸）の名が示すように，くっきりした赤色である。

アカアシシギの繁殖地域は，ヨーロッパから中央アジア，モンゴル，沿海州に及んでいるが，この区域内のどこででも繁殖しているわけではなく，各地に孤立した繁殖地がある

だけのようだ。冬にはアフリカ北部、地中海沿岸、インド、東南アジア、フィリピンなどに渡り越冬する。日本では、これまで観察された個体数が比較的少なく、数の少ない旅鳥だと考えられていたが、最近（1972年）になって、この鳥の集団繁殖地が北海道東部の野付半島で発見された。今までにアジアで繁殖地が見つかったのは、モンゴルと沿海州だけであり、ほかにも繁殖しているところがあるとは考えられるが、この北海道の新繁殖地は貴重なものといえるだろう

海岸や湖岸、沼沢地にすんでおり、あまり深くない水に腹までつかり、頭もくびも水中に沈めて長いくちばしでどろのなかを探り、食べ物をあさっている。ときには、畑や草原のようなかわいた土地にもえさを捜しに出かける

食べ物は季節や場所によってさまざまだが、動物質が85パーセント、植物質が15パーセントぐらいで、動物質のおもなものは、各種の水生昆虫や土壌(どじょう)昆虫とその幼虫である。そのほか、クモ類、小型のカニ、エビ、ゴカイなども食べている

敏捷(びんしょう)活発な鳥で、歩き方は速く、格好がよい。泳ぎも飛行も非常にうまい

繁殖期になると、相手を呼びあい「ヒッ、ヒッ、ヒッ、ヒッ」と笛のように優しく澄んだ鳴き声をたてる。不安にかられたりすると「ヒッ！」という鋭い叫び声をあげる。また、侵入者などが現われると「キョッ、キョッ、キョッ」と鳴きながら輪を描いて飛び、警戒を始める。さえずりは「チャッ、チャッ、チャッ、チョーイ、チョーイ、チョーイ」と聞こえる。渡りのあいだは静かな鳥で、飛びたつとき「ピューイ」と澄んだ声を出す程度である

巣は湿地や沼沢地、水たまりの近くなどの草原につくられる。地面に小さな凹みをつくって、枯れ草を敷いただけの簡単なものだが、草やスゲの茂みのなかに、巧みに隠されている。産卵の時期は地方によって異なるが、ふつう5月ころで、1腹の卵数は4個である。卵は少し光沢をおびていて、黄褐色にセピア色の斑点がある。抱卵期間は約23日で、雌雄交替で行なう

孵化したひなたちは、すぐに巣を離れ、草のあいだを器用に歩きまわる。4週間で飛べるようになり、まもなく独立していく

繁殖期が終わると、また群れをつくるが、大群をなすことはほとんどなく、ふつう他のシギの群れのなかに1～3羽混じっているか、5,6羽の小さな群れでいるようだ。こうして、暖かい地方への旅立ちが始まる

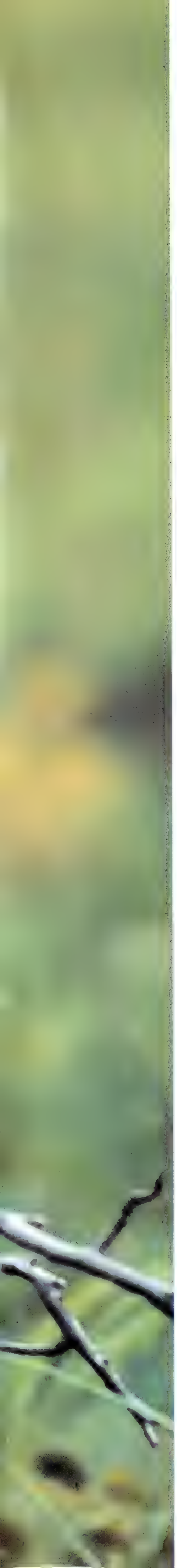


アカアシシギ。シギ科クサシギ属。
繁殖期には沼沢地などの近辺の草原にすみ
杭や切り株の上にとまってよくさえずる。
飛びたつときには「ピューイ，ピューイ」と
かん高い澄んだ声をたてる。
PH. G. QUEDENS

オグロシキ。
繁殖期になると，ごらんのとおりの羽色になる。
飛んでいるときは大きな白い翼帯が見え
尾羽の黒と白の特徴があらわれる。
尾の先の黒帯がオグロシギのいわれである。（右）
PH. E. HOSKING











アオアシシギ。シギ科クサシギ属。いつも神経質で落ちつかず，臆病な鳥なので，観察するのは非常にむずかしい。孤独を好み，静かな海岸を，大股に一歩一歩踏みしめながらゆっくりと歩いている。

PH. DES BARTLETT



ツルシギ *Tringa erythropus*

ツルシギ（クサシギ属）は全長30～34センチで，アカアシシギよりひとまわり大きい。羽色（うしょく）は，夏羽ではすす色をしており，一見してアカアシシギと区別がつくが，冬羽になると，からだの上面が薄い灰褐色に変わり，下面が白くなり，かなりまぎらわしくなる。あしは長く，暗赤色をしている。

ツルシギはアカアシシギより北の地方，つまり，ラップランドと東西シベリアの北部で繁殖し，冬には地中海の沿岸地方やアフリカ，アジアの南部に渡る。日本では多くのシギ類と同様に旅鳥で，本州を通過する個体数はアカアシシギより多い。とくに４月の末から５月にかけては，黒く優美な夏羽の鳥がたくさん渡来する。

渡りの間は，ふつう数羽から30羽ぐらいまでの小さな群れでいるが，ときには数百羽の大群でいることもある。泳ぎは非常にうまく，繁殖期以外のときでもしばしば泳いでおり，危険な場合には巧みに水中にもぐる。

食べ物はほとんど動物質で，水生の昆虫（こんちゅう）とその幼虫〔とくに甲虫と半翅目の昆虫〕がおもなものである。小さな貝，ミミズ，小型のエビやカニなども食べる。

鳴き声はよく響く声で「チューイ」と聞こえ，たいてい飛びたつときにひと声あげる。えさをあさりながら「ジェイ，ジェイ，ジェイ」と早口で鳴くこともある。

巣は，北極圏の低い木がまばらな湿地や草原，沼沢地などにつくられ，アカアシシギのものに似ている。繁殖期はラップランドで５月半ばから６月はじめで，１腹の卵数はふつう４個である。渡りのときには干潟や塩田，海岸近くの水田などにいるが，海岸から遠く離れた湖や池にもしばしば姿を見せる。

アオアシシギ *Tringa nebularia*（クサシギ属）は，ほっそりとして，あしの長い優美な鳥である。全長が32～37センチ，体重が150～225グラムで，ツルシギよりやや大きい。羽色は頭とくびは白いが黒い縦縞がたくさんあり，背中は灰褐色に黒や白の模様が入りまじった色合いで，腰は白い。腹側はまっ白で，のど，胸，わき腹に黒い斑点がある。この斑点は冬羽ではなくなる。くちばしは長く，少し上にそっている。長いあしは，アオアシシギ（青足鷸）の名があるように灰青色である。

アオアシシギは，クサシギの仲間ではいちばん神経質で臆病である。昼間，水辺に一本足で立ったまま，くちばしを羽毛（うもう）のなかに突っこんで，半ば眠りながら休息する習性がある。しかし，ほんのわずかでも怪しい物音を聞きつけようものなら，すぐ目をさまし「ピッ，ピッ，ピッ，ピッ」という鳴き声を発しながら，あっという間に飛び去ってしまう。

繁殖期には，草のよく茂った湿地や沼沢地にすんでいるが，渡りの時期には，砂浜でもどろの深い干潟でも，内陸の池の岸べでも見かけられる。ただ，砂利の多い川原だけは好まないようだ。

食べ物はほとんどが動物性で，アカアシシギやツルシギとほぼ同じものである。

繁殖地域は，だいたいユーラシア大陸の亜寒帯で，ヨーロッパの北部（スコットランド，スカンジナビア半島，フィンランド）からカムチャツカにまで及んでいる。冬にはアフリカ，アジア南部，オーストラリア，ニュージーランドにまで渡って過ごす。日本では珍しい鳥ではなく，ふつう海岸や池の岸などで単独か10羽ぐらいの小さな群れをなしているのがよく見かけられる。地上でも，かなり頻繁に「チョー，チョー，チョー」と鳴いているので，見つけるのは容易である。

巣や卵は，アカアシシギのものとだいたい同じで，ヨーロッパにおける産卵期は５月。抱卵（ほうらん）期間は約25日で，雌雄交替で卵を抱く。ひなは，孵化してから約４週間で親鳥から離れ，独立して暮らすようになる。

コアオアシシキ *Tringa stagnatilis*（クサシギ属）は，その姿がアオアシシギに似ているが，全長が約22センチ，体重80グラムほどでずっと小型である。

海岸より内陸の湿地や沼沢地を好み，ルーマニア，ソ連の南部，中央アジア，モンゴルなどで繁殖する。冬はアフリカ，アジア南部，オーストラリアで越冬するが，渡りの間や越冬地でも，内陸の水辺を好むようだ。日本にも旅鳥として渡来し，珍しいシギのひとつに数えられている。繁殖や習性はアオアシシギとだいたい同じで，中央アジアにおける産卵期は５，６月ごろである。食べ物は水生昆虫（とくに甲虫と双翅目の虫とその幼虫）が主で，小さな巻き貝やカタツムリなども食べる。

アカアシシギ。
1972年６月末，北海道の野付半島で日本初のアカアシシギの繁殖地が見つかった。
写真はそのときのもの。春と秋に渡来するが比較的希少な種である。（102―10，11）
撮影 高野伸二

ツルシギ。シギ科クサシギ属。
夏羽は，シギの仲間としては珍しく全体にほとんどまっ黒だが，冬羽になるとからだの上面が灰褐色，下面が白くなりまったく別の種の鳥のように見える。（102―11）
撮影 高野伸二

コアオアシシギ。シギ科クサシギ属。
「鏡よ鏡，鏡さん。世界でいちばん美しい鳥は…」と，つい口ずさみたくなるような光景。
日本には旅鳥として渡来するが，数が少なく珍しいシギのひとつに数えられている。（上）
撮影 [illegible]



タカブシギ *Tringa glareola*

タカブシギ（クサシギ属）は全長が20〜23センチ，体重が53〜83グラムで，比較的小型の鳥である。頭部と背中は，すすけた暗褐色だが淡黄褐色や白色の斑がある。眉はくっきりと白く，腰と腹側も白いが，くびから腹にかけて暗褐色の縦斑（じゅうはん）がはしっている。尾は黒褐色で，白色の細かい横縞（よこじま）がある。あしは長いが，くちばしはアカアシシギやツルシギほどは長くなく，細くまっすぐである。

タカブシギは淡水を好み，繁殖期には森林帯の沼沢地や湿地，ツンドラにすんでいる。とくに，針葉樹林からツンドラに移り変わる境のところにたくさん営巣（えいそう）する。その繁殖区域はところによって多少ずれはあるが，だいたい北緯50度以北のユーラシア全体である。冬にはアフリカ，アジア南部，オーストラリアなどに渡って過ごす。日本では，海岸近くの湿地や水田，内陸の池の岸にすみ，大群を見かけることはないが比較的ふつうに見られる旅鳥である。だいたいくさむらのあいだに，単独か10羽くらいまでの小さな群れで生活しており，人の姿を発見すると「ピュイ，ピュイ」という声をたてて飛びたつ。

巣はクサシギ属の他の鳥と同様，くさむらのあいだの地表に凹みをつくり，いくらかの枯れ草や小枝を敷いている。自分で木の上に巣をつくることはしないが，ときには低い木の上にある他の鳥の古巣を自分の巣として使うこともあるようだ。1腹の卵数はふつう4個である。産卵期はヨーロッパで5，6月，シベリアで6，7月である。

食べ物は季節や場所によって異なるが，ミミズ，昆虫とその幼虫（鞘翅目，双翅目，半翅目が多い），クモ，小型の貝類などである。

クサシギ *Tringa ochropus*（クサシギ属）はタカブシギより少し大型の鳥だが，姿も色も非常によく似ていてまぎらわしい。全長が23〜26センチ，体重が70〜95グラムである。羽色は，背面が暗緑褐色で白色の斑点も細かく，タカブシギよりやや黒っぽく見える。また，腰の白色部もタカブシギより目だって見える。

クサシギは，習性や生息場所もタカブシギとよく似ていて，繁殖区域もだいたい同じだが，シベリアの北部やカムチャツカでは営巣しない。日本では，渡りの途中水田や湿地にすんでいるが，その数はタカブシギよりやや少ない。しかし本州の中部以南ではそのまま越冬するものもある。飛びたつとき「ツィ，ツィ」と尻上がりの澄んだ鳴き声をたてる。

タカフシギ．シギ科クサシギ属。
ふつうくさむらのあいだに単独か
10羽ぐらいまでの小さな群れでいて
人間などが近づくと「ピッ，ピッ，ピッ」と
鳴き声をたてて飛びたつ。（上）
PH. L. FATRAS



イソシギの親子。シギ科クサシギ属。
巣はシギの仲間としては念入りにつくられており
イネ科の植物などによって巧みに隠されている。
抱卵中に，外来者が少しでも卵や巣にふれると
すぐ抱卵を中止し巣も卵も放棄してしまう。（下）
PH. E. HOSKING







イソシギ *Tringa hypoleucos*

イソシギ（クサシギ属）は全長が18〜21センチ，体重が約68グラムで，クサシギの仲間では小型の鳥である。羽色は，からだの上面が青銅色をおびた褐色で，眉とからだの下面は白色である。あしは黄緑色，くちばしはまっすぐで，ふつう頭部より少し長い。

イソシギの繁殖地域は広く，ユーラシアと北アメリカの温帯と亜寒帯のほとんど全域に及ぶ。冬には熱帯や南半球に渡る。日本では北海道，本州で繁殖し，あるものは南日本で越冬するようだ。

渡りの時期には，海岸の砂州や岩礁，川原や池のほとりなどでよく姿を見かけられる。水辺を早足で歩きながら，からだを水平に保ち，尾をたえず上下に振り動かしている。飛び方は軽やかで，小刻みに羽ばたき，ひと羽ばたきごとにつばさを止め，ちょっとの間，滑空するようなぐあいで水面を低く飛ぶ。高いところを飛ぶのは，かなりの距離を移動するときだけだが，そのときは，ふつうに力強く羽ばたいて飛ぶ。泳ぎも潜水もたいへんうまく，両翼を使って巧みに水面下を泳ぎ，はるか遠くの水面にぽかりと頭を出すという芸当も見せる。鳴き声はカワセミによく似ており，

クサシギ。シギ科クサシギ属。
巣はふつう地上にあるが
木の上につくられた，他の鳥の古巣に
自分の卵を産むこともある。
ふつう，単独か２，３羽で暮らしている。（上）

撮影　島田



飛びながら「ツィー，ツィー」と澄んだ声をたてる。

イソシギが，繁殖地にやってきたときには，すでにつがいになっており，到着するやいなや川沿いにテリトリー（なわ張り）を選ぶ。テリトリーが決まると，雄は雌に対してしつこくディスプレーを始める。そのやり方はアカアシシギとだいたい同じである。ディスプレーの間にも，雄は雌を督励し，砂地に凹みを掘って巣をつくる作業をやらせようとする。そしてかなり深い（深さ約4センチ）凹みができると，内側に枯れ草を敷きつめる。

巣は，灌木の茂みやトウシングサ，あるいはイネ科の植物によって，外敵の目にふれないよう巧みに隠され，水辺からそう遠くないところにある。イソシギの巣のつくりは，シギの仲間のなかでは非常に念入りのほうだ。

5月のはじめに4個の卵を産むが，卵は光沢をおび，茶褐色の殻に茶色い大小の斑点があり，十字花型に並べられてある。雌雄交替で22日間抱卵しつづける。見知らぬものが卵に触れることを極端にきらい，卵の位置がちょっとでも変わったことがわかると，たちどころに抱卵するのをやめ，卵も巣も放棄して



しまう。ひなは孵化するとすぐに巣を離れる。外敵が現われたりするとけっこうすばやく歩き，灌木の茂みや石のあいだにきわめて巧みに身を隠す。

日本では北海道と本州で繁殖し，きれいな水の流れる広々とした川原や，山地の溪流がちょっとゆるやかになったところの砂州などで巣が見つかる。繁殖地にはおそくとも4月中には到来し，5月に産卵する。6月の末になって卵が見つかることもあるが，これはおそらく，最初の繁殖に失敗したものであろう。巣は川原の灌木や高い草の根もとにつくられる。秋は7月末から9月ころまでに繁殖地を去る。

食べ物は90パーセントが動物質のもので，その半分は昆虫とその幼虫である。昆虫は，水生のものの幼虫をもっとも多く食べるが，ハエ，カ，カゲロウなども，飛んでいるところをうまく捕えて食べている。そのほかクモ，ミミズ，小さなカタツムリ，ヤスデなども食べる。地上では，頭とくびをすくめてそうっと獲物に近づきざま，くちばしのたったひと突きで獲物を捕えてしまうところなど，まったく器用なものである。





イソシギ(右の写真は冬羽)。繁殖中に巣に近づくと「ツィー，ツィー」と不安げな鳴き声をたてる。日本では清流の川原などに巣をつくるがふつう海岸近くにすんでいるのでイソシギ（磯鷸）の名がある。(上2枚)
撮影 水野仲彦(左) PH. AKE LINDAU-NATUFOTOGRAFERNA（右）

アメリカイソシギ。*Tringa macularia*。シギ科クサシギ属。全長約15センチ。メキシコ以北の北アメリカ大陸で繁殖する。イソシギによく似ているが，胸と腹にある褐色の斑が著しい特徴だ。(左下)
撮影 高野伸二

キアシシギ。シギ科キアシシギ属。シギカニ合戦というのも大げさすぎるがはさみを構える，このカニの必死な態度。カニは大好物のひとつなのだがつれづれなるままにカニと戯れているのか。(下)
撮影 高野伸二



キアシシギ

Heteroscelus incanus

キアシシギはキアシシギ属に属し，全長が24～29センチ，体重が94～173グラムの鳥である。からだのわりにくびとあしが短く，シギの仲間ではずんぐりしたからだつきをしている。羽色は繁殖期（夏羽）には，背中側が全体に濃い灰色で，眉が白く，顔面と腹側は白っぽいが細かい縞がたくさんはしっている。この羽毛は秋になると抜けかわり，背中が灰褐色となり，くびや腹の細縞がなくなってしまう。短いあしは濃い黄色である。

キアシシギは東部シベリアやカムチャツカで繁殖し，冬をフィリピンやインドネシア，オーストラリアなどで過ごす。また，アラスカで繁殖し，南アメリカや西南太平洋で越冬するものもある〔アラスカで繁殖するキアシシギは，学者によりいろいろな理由で，アジアのものと同種にも別種にもされる。別種にした場合アジアのものはキアシシギ ***Heteroscelus brevipes***，アメリカのものはメリケンキアシシギ ***H. incanus*** となる〕。

日本では旅鳥で，もっともふつうに見られるシギ類のひとつである。海岸を好み，干潟や塩田，干拓地のようなところにも，砂浜にも，また岩礁の上にも見られる。ふつうはかなり大きな群れでいて，数百羽になることも少なくない。飛びたつときや飛んでいるときに「ピュウーイ，ピュウーイ」と聞こえる澄んだ鳴き声をたてる。

この鳥の繁殖についてはほとんどわかっていない。シベリア東部やカムチャツカでは，標高1000メートル以上の高山帯で繁殖するといわれているが，その巣や卵はまだ詳しく確かめられていないようだ。アラスカでは，巣や卵やひなが見つかっているが，詳しい観察はやはりなされていない。発見された巣は，河床の砂利のあいだに凹みを掘り，細い根や小枝を敷いたものであったという。

1腹の卵数は4個で，一見カラスの卵に似ていて，青緑色の殻に焦茶色の斑点がついている。産卵期は6月から7月のはじめ，抱卵は雌がおもに行ない，雄は巣を守る役目を引き受けるといわれている。

食べ物は，繁殖期には昆虫（おもに毛翅目と双翅目の成虫と幼虫）が80パーセント近くを占め，他に小さな無脊椎（むせきつい）動物（貝類，端脚類）も食べる。渡りの間も，昆虫，カニ類，岩礁にいる甲殻類や貝類など，ほとんど動物質のもののようだ。

ソリハシシギ *Xenus cinereus*（ソリハシシギ属）は全長が21～25センチ，体重が67～105グラムの小型のシギで，その名が示すように長いくちばしは上にそっている。羽色は，背面が黒い縦斑のある灰褐色で，腹は白い。あしは短く黄褐色である。

繁殖区域はフィンランドから沿海州までのユーラシア大陸で，巣は川岸や河口，川のなかの小島の草地のなかにつくられる。産卵期は西シベリアで6月のはじめころである。冬はアフリカ，アジアの南部，オーストラリアなどに渡る。日本には渡りの途中に立ち寄り，干潟や防波堤の上で見かけられるが，その数はあまり多くない。ふつう，10羽くらいまでの小さな群れでいるか，キアシシギなどの群れに混じっているかしており，ときどき「ピリ，ピリ，ピリ」という澄んだ声で鳴く。

ソリハシシギ。シギ科ソリハシシギ属。
全長が21～25センチと小型の鳥で
名まえのとおり，長いくちばしは上にそっている。
薄もやのなかの水たまりに
えさを求めてやってきたのだろうか。

撮影　高野伸二





抱卵するキョウジョシギ。シギ科キョウジョシギ属。
北極圏内の海岸では，どこででも繁殖しており
巣は，このような岩のあいだや海岸の砂礫地につくる。
産卵期は５～７月で，北にいくほど遅れる。
力持ちで，からだほどの重さの石もひっくり返す。
PH. E. HOSKING

キョウジョシギ

Arenaria interpres

キョウジョシギ（キョウジョシギ属）は，そのずんぐりしたからだつきや動作が，チドリの仲間に似ているところがある〔注１〕。ツグミくらいの大きさで，全長が20～24センチ，体重が約130グラムの鳥である。

繁殖期の羽色は背が黒とくり色で，腹が白く，胸のあたりは黒い。顔面は特徴のある白と黒の模様になっている。冬羽では背中のくり色がなく，全体に黒褐色になり，顔の白い部分も黒くなる。くちばしは黒く，あしはオレンジ色で，どちらも短い。

ユーラシア大陸とアメリカ大陸の北極圏内では，どこででも繁殖する。極北の海岸は，いたるところ岩や小石におおわれているが，キョウジョシギはそういった場所を選んで営巣するのである。ごくまれに，内陸のツンドラや河口，沿岸の小島の草地などに巣をつく

キョウジョシギ。
後方の色の薄い鳥は，ハマシギと思われる。
ふつう５～30羽の小さな群れでいるが
このようにハマシギなどといっしょになって
大きな群れをなしていることもある。（上）
PH. E. HOSKING



ることもある。

この鳥は非常に遠距離を飛んでいく渡り鳥のひとつで，冬には南半球にまで渡り越冬する。渡りのときも海岸にいるが，岩礁の上でも，砂地，泥地でも，えさのあるところならどこにでもいるようだ。ふつうは５～30羽の小さな群れでいて，人をあまり恐れない。

日本では旅鳥で，渡来数も多く，春と秋には干潟や岩礁，水田などでかなりの数の群れを見ることができる。ときには数百羽の大群や，ハマシギなどといっしょになった，もっと大きな群れでいることもある。

キョウジョシギの特徴は，羽毛の美しさ，身のこなしの優雅さと軽快さ，性格の激しさである。キョウジョシギ（京女鷸）の名の由来も，京女のように優美な鳥であるということらしい。

いつもせわしげに，身軽にあちこちと歩きまわり，がんじょうなくちばしで小石を巧みにひっくり返しては，その下に隠れている小さな動物を捕えている。実際すごい力持ちで，自分と同じくらいの重さの石でもひっくり返してしまう。また，フルスピードで走り，岩から岩へととびはね，超スピードで飛行し，水面すれすれに飛ぶことも多い。空高く舞いあがると，力強い羽ばたきで軽々と旋回し，直線的に飛び去る。飛んでいるときに「キリッ，キリッ，キリッ」という特徴ある鳴き声をたてる。

食べ物は，浜べで見つかるものならなんでも食べる。つまりいろいろな貝類や甲殻類，昆虫類，植物の砕片などで，またミミズ類やゴカイなども，湿った砂地から捜しだして食べる。繁殖期の間は，地上や水たまりにいる昆虫（とくに鞘翅目，双翅目，鱗翅目）が主食である。

巣をつくる場所は，岩のあいだや海岸の砂礫地である。巣は簡単な凹みをつくって，内側に草の茎を少し敷きこんだだけのもので，そこに４個の卵を産む。産卵期は５～７月で，北へいくほどおそくなる。卵は表面がすべすべしていて，オリーブ色か緑色で暗褐色の斑がある。抱卵期間は21日で，おもに雌の仕事である。

ひなは孵化してから数時間で巣を離れる。ひなに対する親鳥の情愛は厚いもので，外敵にも勇敢に立ち向かい，最善をつくしてひなを守る。

キョウジョシギ。
この鳥の特徴は，羽毛の美しさと
身のこなしの優雅さ，性格のはげしさにある。
キョウジョシギ（京女鷸）の名の由来も
京女のように優美な鳥ということらしい。
撮影　水野仲彦

日本のシギ・チドリ類 1

渡来する種とその識別法

高野伸二

チドリ目チドリ亜目の鳥は、ふつうシギ・チドリ類と呼ばれ、12科に分類されている。このうち、今までに日本に渡来した記録のあるものは8科64種で、ほとんどが春や秋の渡りの時期にちょっと立ち寄る旅鳥となっている（**表1参照**）。64種のうち規則的に見られるのは46種で、残りは年によって渡来したりしなかったりするが、いずれも水辺にすみ、姿もたがいに似た点が多いので、野外での識別はなかなかむずかしい。そこで、ここではいくつかのポイントをあげてその判別の手助けとしたい。

シギとチドリの違い

表1からもわかるとおり、日本に渡来する種のほとんどはチドリ科かシギ科に属する。そこでまず、この両者の違いを見ておこう。

一般的にいって、シギとチドリでは、くちばしの長さ、目の大きさ、頭の形、えさの取り方に違いがある。シギ類のくちばしは比較的長く、形はまっすぐなもの、そり返ったもの、下に曲がったもの、先が平たいものなどさまざまであるが、チドリ類ではまっすぐで短く、先の部分が少し太くなっている。また、チドリ類では目がシギ類より大きく、頭の形が丸い。さらに、シギ類は頭を下げたままあちこちとえさをあさるが、チドリ類はえさをとると頭を上げ、少し歩いてはまた頭を下げてえさをとるといった動作を繰り返す特徴がある。この違いは、干潟（ひがた）でよくいっしょに群れをつくっているハマシギとシロチドリ、あるいはオバシギとダイゼンなどを比較するとわかる。



全部同じオオソリハシシギ　姿勢や見る方向によって大きさがいろいろに見える



チドリとシギの違い　左ダイゼン（チドリ）と右オオソリハシシギ（シギ）

野外識別のポイント

では次に、実際に野外でシギ・チドリ類を見た場合、どこに着目すればいいのかを述べてみよう。

1．大きさ　ここでは次のように分けてみた。しかしシギ・チドリ類の大きさは個体差が著しく、また、からだの向きや姿勢によっては大きさの判定に困る場合もあることを念頭に置いてほしい。

①トウネン級（最小、スズメ程度）
②コチドリ級(だいたいモズくらい)
③ハマシギ級(ツグミよりやや小さい)
④クサシギ級(ツグミ程度)
⑤キアシシギ級(それよりやや大きい)
⑥ツルシギ級(トラツグミくらい)
⑦ダイゼン級(ハトぐらいまで)
⑧チュウシャクシギ級（ハトより大）
⑨ダイシャクシギ級（最大、ハシブトガラスよりも大きい）

2．形　次の型に分けたが、同じ型のなかでも種によって少しずつ違っていることはいうまでもない。

①キアシシギ型(くちばしは細長く、頭は小さく、くびは長め。あしも長いものが多い。えさをとるときはくびをのばし、活発に動きまわる。クサシギ、タカブシギ、アカアシシギ、アオアシシギ、ソリハシシギなど)

②オバシギ型(胴が太く、あしが短くて、前型よりずんぐりした印象を受ける。くびも太く短く、しかもえさをとるときは縮めていることが多い。ハマ

→ ＊

表1　日本産シギ・チドリ類の科別種類数

科名	種類数	繁殖する種類数	ふつうに越冬する種類数	規則的に見られる種類数
シギ	44	4	9	32
チドリ	12	4	6	9
ヒレアシシギ	2	0	0	2
セイタカシギ	2	0	0	1
ミヤコドリ	1	0	0	0
タマシギ	1	1	1	1
レンカク	1	0	0	0
ツバメチドリ	1	0	0	1
計	64	9	16	46

表2　おもな日本産シギ・チドリ類の識別表

種名	大きさ	形	飛んだときのパターン	鳴き声
タマシギ	⑥	⑧	②	[illegible]
コチドリ	②	⑥	②	ピオピオ
イカルチドリ	④	⑥	①	ピオピオ
シロチドリ	②	⑥	①	ピュルピュル
メダイチドリ	④	⑥	①	クリリリ
ムナグロ	⑤	⑥	① I	キビヨー：キュビッ
ダイゼン	⑦	⑥	③	ピューイー
ケリ	⑧	⑧	③	キキッ
タゲリ	⑦	⑧	④	ミュー
キョウジョシギ	⑤	⑧	③	ゲレゲレ：ギョッギョッ
トウネン	①	②	①	チュルチュル
ヒバリシギ	①	②	①	プリリ
オジロトウネン	①	②	①	チリリリ
ウズラシギ	④	②	①	プルルル
ハマシギ	③	②	①	ジュール
サルハマシギ	④	②	③	フィ
コオバシギ	⑥	②	③	モッモッ
ミユビシギ	③	②	①	キッ
エリマキシギ（雄）	⑥	⑧	①	
キリアイ	②	②	①	ジュール
ツルシギ	⑥	①	④	チュイッ
アカアシシギ	⑥	①	③ II	ピーチョチョ
コアオアシシギ	④	①	④	ピュー：ピッピッピッ
アオアシシギ	⑦	①	④	チョーチョーチョー
クサシギ	④	①	④	チュイイチュイチュイ：チュイリー
タカブシギ	③	①	④	ピッピッピッ
キアシシギ	⑤	①	②	ピュイ
イソシギ	③	①	①	ツーリーリー
ソリハシシギ	④	①	① III	ピリピリピリ
オグロシギ	⑧	③	③	キッキッ
オオソリハシシギ	⑧	③	④	ケーケー
ダイシャクシギ	⑨	④	④	カーリュー
ホウロクシギ	⑨	④	②	ホーリ
チュウシャクシギ	⑧	④	④	ポイピピピピ
ヤマシギ	⑧	⑤	②	ウーウ　：チキッ
タシギ	④	⑤	② IV	ジェッ
チュウジシギ	⑥	⑤	②	ゲッ
オオジシギ	⑥	⑤	②	ゲッ：ズビーヤクズビーヤク
アカエリヒレアシシギ	②	⑦	①	プップッ
ツバメチドリ	⑤	⑧	④	クリリクリリ

I　従来ムナグロには翼帯が出ないとされているが、実際には淡い翼帯が出るので①とした
II　つばさの中央を通る白帯ではなく、次列風切が白い
III　つばさの中央を通る白帯ではなく、次列風切後縁に幅広い白線が出る
IV　つばさの後縁に細い白線が出るが、そう目立たないので②とした

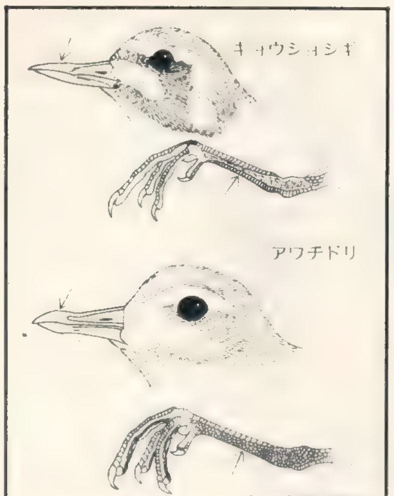
カラーページ注

〔注1〕 キョウジョシギの分類的地位

キョウジョシギは、外観や歩き方がチドリ類に似ているが、くちばしの形態や羽毛のパターン（本誌101号注2参照）は、チドリ科の鳥と異なる。したがって、チドリ科に分類する人も、またシギ科に入れる人もあった。

日本鳥学会の『鳥類目録』でも、3版（1942年）ではチドリ科に、4版（1958年）ではシギ科に、そして5版（草案・1971年）では、再びチドリ科に入れている。

キョウジョシギは、現在ではふつうシギ科に分類される。これはおもにロウ（P.R. Lowe, 1931）の頭骨の比較研究によっており、口蓋骨の形状、方骨の形態および頭骨との関節のしかた、そのほか2、3の点でシギ科とチドリ科に違いがあり、キョウジョシギはシギ科の特徴に一致するからだ。この点ではロウの研究はその後も支持されている。ほかの骨格や脚筋の比較研究でも、キョウジョシギはシギ科との相似点が多く、チドリ科に分類する根拠は見つかっていない。



え　小河原芳美

ただひとつ問題になるのは、北アメリカの太平洋岸に分布する、アワチドリ *Aphriza virgata* という種の存在である。この鳥は、羽色がキョウジョシギ属（とくにクロキョウジョシギ *A. melanocephala*）にきわめてよく似ているが、くちばしや跗蹠（ふしょ）のうろこの配列状態が明らかにチドリ科の鳥の特徴をそなえている。その内部形態はキョウジョシギ（左図）に一致するといわれているが、はっきり書いたものがない。したがって、アワチドリを含めてさらに研究する必要があろう。なお、アワチドリがシギ科に属することが認められた場合は、シギ科とチドリ科を外形的特徴で区別することは、不可能になる。［25ページ右］ ■

（森岡弘之）

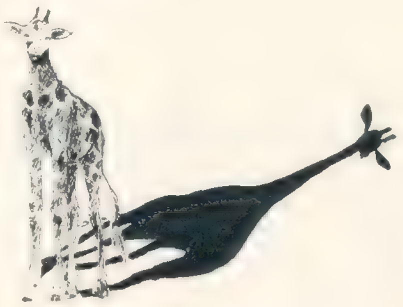
生きものの世界への疑問 7

対立しない異端？

日高敏隆

進化論のうえでいつもダーウィンと並んで登場するのはラマルクである。よく知られているとおり、ラマルクはダーウィンより50年ほど早く、進化の思想を提唱した。かれの考えはラマルキズムと呼ばれ、ダーウィンの説，すなわちダーウィニズムとは対立するものとされている。突然変異と自然淘汰による現在の進化説は、ダーウィニズムにおける変異を突然変異に限定した、いわばダーウィニズムの修正であるので、ラマルキズムは突然変異・自然淘汰説（ネオダーウィニズム）とも対立することになる。

では、ラマルキズムとダーウィニズムはどこが対立するのか？　あえて説明する必要もないと思うが、ラマルクは環境が生物にある〝必要〟（besoin）を生みだすと考えた。たとえば寒い環境は生物が何かの形で寒さに対処する必要を生むであろう。そこで生物は体に毛をはやすとか、地中にもぐるとか、なんらかの方向に変化することによってこの必要を満たそうとする。そして一生の間に獲得された変化は子に遺伝し，代々蓄積されていく。その結果、今日見るとおり環境にみごとに適応した生物ができあがった。



ラマルクはこう考えたのである。

この説によると、生物ははじめから環境に適応するように変化していくはずである。いわば適応は必然的である。環境とは関係なくあらゆる方向に変化が生じ、自然淘汰という第２段階で環境に適応したものが残っていくとするダーウィニズムおよびネオダーウィニズムとは、この点で考え方がまったく違うのだ。

さらに、ラマルキズムとネオダーウィニズムが違う点は、ラマルキズムがいわゆる〝獲得形質の遺伝〟を認めていることである。ネオダーウィニズムでは、進化の素材になる変化、すなわち突然変異は、遺伝子または染色体に起こる変化であって、ある個体が生きている間にからだに生じた変化、すなわち獲得形質は、遺伝もしなければ進化のうえでの意味ももたない。なぜならそれはきわめて外面的な変化であって、遺伝子または染色体レベルの変化という内面的な変化にはいたらないからである。

さまざまな論争

このことについては、これまでにずいぶん論争が繰り返され、たくさんの実験が行なわれた。獲得形質が遺伝することを実験的に証明したと主張したカンメラーという学者は、その実験がインチキであったといわれて、さんざん非難され、ついに自殺した。この非難が正しい指摘であったのか、いじわるい中傷であったのか、今でもはっきりとはわからない。

かつて有名だったソ連のルイセンコ論争の時代には、獲得形質が遺伝するかどうかについての議論が大々的に再燃し、それを証明する実験、否定する実験がたくさん現われた。

たとえば、ハツカネズミを高い温度で飼っていると、からだの長さに対して耳や尾やあしが長くなる。逆に低温で飼っていると、そのような突出部分が短くなる。これは寒い土地にすむ恒温動物の種では、一般に耳、口先、くび、あし、尾などが、暑い地方にすむ同じ仲間の別の種より短いというアレンの規則と一致する変化であり、体温の発散との関係で説明がつく。つまり、そのようなラジエーター的な部分が高温では大きくなり，低温では小さくなって、体温の調節を容易にするのだと考えられる。

たとえば高温で何代も飼いつづけていくと、ハツカネズミの尾は、一代また一代としだいに長くなっていく。したがってこれは高温という環境に適応して〝獲得〟された形質が次の代に遺伝したことを示すものと主張された。

しかも、この尾の長いハツカネズミを、ふつうの温度で飼育された〝標準型〟ハツカネズミとかけ合わせると、その子は標準より尾が長いのである。

ここまではよい。その先になると、議論は混乱してくる。すなわち、今度はこの尾が長くなったハツカネズミを、低温へ移して飼うのである。すると尾は代々短くなっていって、何代かたつと、前から低温で飼われていたものと同じところまで短くなってしまうのである。

〝だから獲得形質は遺伝するのだ〟と、この実験をやった人はいう。高温で尾の長くなったものが低温に移されると、今度はこの新しい環境に適応しはじめ、代代それが遺伝して、尾は低温向きに短くなっていくのだ、と考えるのである。

ところが、ネオダーウィニズムではそうは考えない。もし獲得形質が遺伝するというのなら、そのような変化が遺伝子

カラーページ解説

＊　　　・

シギ、トウネン、ウズラシギ、ミユビシギ、キリアイ、ヘラシギなど）

③オオソリハシシギ型（くちばしがからだにくらべて長く、基部が太い。あしは中ぐらいか長め。くびはあまり長くなく、縮めている場合が多い。えさをとるときはくちばしを垂直に使うことが多く、水中や土中に基部までさし込むこともある。オグロシギ、オオソリハシシギの２種）

④ダイシャクシギ型（くちばしが長く下に曲がっているのが特徴。くびは長めで、あしは中ぐらい。いちばん大型の種類を含み、動作はゆっくりしていることが多い。ホウロクシギ、チュウシャクシギ、コシャクシギなど）

⑤タシギ型（胴は太く、くびとあしは短め。くちばしがまっすぐで長い。えさをとるときは土中や水中にくちばしを垂直にさし込み上下に動かす。ヤマシギ、アオシギ、オオジシギなど）

⑥チドリ型（くちばしが短めで、先が少し太くなっている。くびも短めで、しかも縮めていることが多い。頭はシギ類にくらべて、丸く大きい。小型の種は地上をすばやく走る。ダイゼン、ムナグロ、メダイチドリなど）

⑦ヒレアシシギ型（胴は細めで、くびも細く長い。くちばしはまっすぐで短い。あしも短く、地上では不格好だが、水上を泳いでいることが多いから優美に見える。アカエリヒレアシシギとハイイロヒレアシシギ）

⑧型外の種（セイタカシギ、ソリハシセイタカシギ、ミヤコドリ、タゲリ、ケリ、キョウジョシギ、エリマキシギ、ツバメチドリ、タマシギなどは独特の形をしているから、本誌本文、図鑑等を参照してほしい）

3．飛んだときのパターン　シギ・チドリ類では、飛んだときの姿が識別のうえでの重要なポイントとなる。基本的には、つばさに白い帯が出るか出ないか、腰が白いか白くないかのふたつの条件の組みあわせで４つのパターンができる（**図２参照**）。ただし、白帯

図１　日本産のおもなシギ・チドリ類の形



1　タカブシギ
2　ホウロクシギ
3　オオソリハシシギ
4　アカエリヒレアシシギ
5　ハマシギ
6　キアシシギ
7　トウネン
8　チュウシャクシギ
9　キョウジョシギ
10　オハシギ
11　アオアシシギ
12　ソリハシシギ
13　イソシギ
14　タシギ
15　ダイゼン
16　コチドリ
17　シロチドリ
18　メダイチドリ

1型＝1、6、11、12、13
2型＝5、7、10
3型＝3
4型＝2、8
5型＝14
6型＝15、16、17、18
7型＝4
8型＝9

図２　シギ・チドリ類の飛んだときの基本的な４つのパターン



1　つばさに白帯があり腰は白くない
2　つばさに白帯はなく腰も白くない
3　つばさに白帯があり腰は白い
4　つばさに白帯はなく腰は白い

にまで及んで、遺伝子も変わってしまわなくてはならない。したがってたとえ環境が変わっても、その形質はそのまま遺伝していくはずなのである。

ここでわれわれは、ことばの定義という問題にぶつかる。この場合、まったく同じことばがまったく違って定義されている。議論がかみあうはずがない。



みずからラマルキストだという人もいた。10年ほど前に死んだフランスのある有名な洞窟生物学者である。いずれこの『朝日＝ラルース』にもでてくると思うが、洞窟のなかにすむ動物には、目のないものが多い。このような洞窟性動物の進化は、いろいろな立場から説明されている。ラマルク的にいえば、光のないところでは目は不用であり、むしろひげとか嗅覚とかが重要になる。だから目がなくなり、昆虫なら触角や触毛の異常に長い種ができあがったのだ。ネオダーウィニズム的にいえば、目のない突然変異は地上でも洞窟内でも同じ頻度で生じる。明るい地上では目のない突然変異は致命的でとうてい生きていけないから、できてもできても自然淘汰でふるい去られて残らない。ところが洞窟のなかではそれは別になんの不利にもならなかったから、そのまま温存されていき、たまたまそれと他の変化の組みあったものができれば、そのほうが有利であったから、このほうが残っていったのだ。

けれどこの洞窟生物学者は別なことをいっている。洞窟というのはきわめて特殊な環境である。いつも暗黒で温度は低く、湿度は100パーセントになる。地上の生活をしていたものがいきなりこんなところへはいっても、とうてい生きてはいけない。ある準備段階が必要である。

かれは高地の腐植土のなかにすむ昆虫が洞窟昆虫の前段階だと考えた。そういうところは温度は低く、いつもじめじめしている。そしておもしろいことに、このような場所は、ちっとも暗くないのに、洞窟のなかと同じく、目のない昆虫が見られるのである。

かれはこう考える。このような場所では、低温・多湿のためにからだのなかでの色素の形成がおさえられる。その結果、皮膚の色は薄くなっていく。目の色素もできないので、目もなくなっていく。この変化は環境の直接的な影響のもとに起こった〝獲得形質〟であるが、これは〝当然〟遺伝する。その結果、明るいにもかかわらず、目のない種ができてくるのだと。

このような変化は、適応という意味ではほとんど価値がない。冷たくて湿っているから、やむなくそうなってしまっただけである。しかし、もし地球上が乾燥しはじめたら、それまで無意味であったこの変化が、その価値をあらわす。そのような昆虫は地中へもぐっていき、ついに洞窟内にはいりこむ。もともと目がなく、冷たい、湿ったところにいたのだから、洞窟という異常な環境のなかでも生きていける。腐植土のなかでの変化は〝前適応〟であったのだ。

対立のなかの共通項

この説が正しいかどうか、ぼくは知らない。とにかく、この場合にも、獲得形質は〝当然〟遺伝するものと考えられている。

しかし、生物のもつ遺伝的な性質の情報が遺伝子にになわれているという現代の認識にたてば、獲得形質の遺伝ということは、ありえないように思われる。

あるいは、ありうるかもしれないが、きわめて困難であろう。これを基盤にして進化の機構を考えることは、かなり無理なようにみえる。

獲得形質がほんとうに遺伝するかどうか、遺伝しうるかどうかということより、もっと重大な問題があるように、ぼくには思われる。それは、この獲得形質の遺伝という考え方は、突然変異・自然淘汰という考え方と、ほんとうに対立したものなのだろうか？　ということなのである。

はじめに述べたとおり、この考え方は現代の進化理論であるネオダーウィニズムと対立するものと考えられ、それゆえにこそ、たえず論争が起こってきた。形勢はいつも獲得形質遺伝派に不利であって、この派は正統派からたえず〝異端〟として迫害されてきた。

しかし、よく考えてみると、このふたつの考え方には共通したところがある。それはどちらも、いま、存在する種に少しずつ変化がつけ加わって別の種ができる、というプラスアルファの思想に立っている。違うのはそのアルファが、生活と環境のなかで獲得されるのか、あるいは生活とも環境とも関係なく偶然に生じる突然変異によるのかという点だけだ。

進化ははたしてプラスアルファの形で起こってきたのだろうか？　もしそうなら、ひとつの種ともうひとつの種とのあいだに、明確な境界があって、それを乗りこえることがものすごくむずかしいのはなぜなのだろうか？

前にもいったとおり、人間はサルに毛を3本つけ加えたものではない。これはどの種についてもいえることだ。そのようなものがプラスアルファを積みかさねていくと、いつかは生じるものなのだろうか？　それがぼくにはどうもわからないのである。■　（東京農工大学教授）

イラスト・後藤喜久子



カラーページ解説

の太さは種によって異なるし、つばさの中央部を通るものだけでなく、アカアシシギのように次列風切（じれつかざきり）が白いものやソリハシシギのように次列風切の後縁に太い白線の出るもの、タシギやオオハシシギのように翼後縁に細い帯の出るものなどがある。また、腰の白色部も大小いろいろで、アオアシシギやツルシギのように背のほうにまでそれが食いこんでいるものもある。要するに、どこがどんなふうに白かったかを見ることがたいせつである。

4．鳴き声　ほとんどの種が独特の鳴き声をもっており、それだけで種を判別することができる。しかし、一般に地上では黙っており、飛びたつときや飛行中に鳴くことが多いから、そういうときには注意を要する。

5．その他の補助条件

色彩　夏羽の場合には色彩によって見分けられるものが多い。しかし冬羽では多くの種が灰褐色の似た色になる。ただ、わき羽が黒いとか褐色みが強いとかいうことが役だつ場合もある。

くちばしの長さ　同じ型のなかでも種によって長さが違うから、頭の長さと比較して、頭長と同じくらいとか、頭長の1.5倍とかいうように観察する。

あしの長さと色　赤、緑、黄、黒などさまざまな色があって特徴となるが、遠距離の場合や光線のぐあいの悪いときは意外に見にくい。長さは、飛んだときに尾羽（おばね）より後ろにあしゆびが出るかどうかを注意する。

えさとりなどの動作　わりにゆっくり歩いてえさをとるもの、活発にあちこち向きを変えてとるものなどがある。

以上に述べたポイントによって日本産のおもなシギ・チドリの識別表をつくると表2のようになる。大きさの欄で③とあればハマシギ級、形の欄で②とあればオバシギ型、飛んだときのパターンの欄で①とあれば、つばさに白帯があり、腰が白くないことを示している。■

（日本野鳥の会理事）

写真・イラストとも筆者

漢字のふるさと　73

藤堂明保

九官鳥（きゅうかんちょう）　広州の東南に榕樹の林があり、数キロにわたって鳥が群棲している。朝から夕方まで、1時間ごとに鳴く鳥が交代して、天然のオーケストラが開けるそうだ。なんといっても、華南と西南中国は、鳥の宝庫である。キュウカンチョウも、このあたりにいたのが北方に紹介されたものだ。北京語では秦吉了 qín jí liao ともいうが、たぶん鳴き声をまねた擬声語だろう。

前6，7世紀の歴史を書いた『春秋左氏伝』（昭公25年の条）に「鴝鵒来たりて巣をつくる」と記されている。「よく人言をなす鳥」というわけで、北方漢人は何か不気味な前兆のように見たらしい。これが今日の九官鳥の古名である。だがそのうち、「人言をなす」だけで、べつに実害は及ぼさないことがわかって、閑人に飼われるようになった。

中国では、お役人もろもろを「九官」「九職」といい、そのランクを「九品」という。そこで「なんでも屋さん」という意味で「九官鳥」と名づけ、俗語では、やはり「なんでも、多数」を表わす「八」を用いて八哥 bāge（なんでものあんさん）と呼ぶ。■



赤外線こたつとネコ

〈問〉 3歳のネコです。昨年から赤外線こたつにはいると、目から膿のようなものが出るようになりました。治療法がありますか。 （米子市・持田収司・12歳）

〈答〉 冬がきてこたつを出すとネコはさっそくもぐりこんでくるものです。室内で飼っているイヌもよくはいりこんできます。今では炭とか練炭を入れるこたつを使う家庭は少なくなったでしょうが、まだまだ田舎や山村では重宝がられているはずです。炭火や練炭火からは一酸化炭素という有毒ガスが発生します。とくに火がよくおきていないときは多量に出て、人も動物も吸うと中毒し、運動神経や呼吸の麻痺や、意識不全などを起こします。ネコがこたつにはいり、しばらくしてふらふらになって出てきて、そのまま倒れてしまうのは、このガスの中毒です。そのほかにも刺激性のガスがいっしょに出るので、呼吸器や目、鼻、のどの粘膜がおかされ、涙が出たり、咳をするようになります。毎日ガスにさらされていると、神経麻痺がつづくようになります。

一酸化炭素による急性中毒が重いときは、中枢性の運動麻痺が強く起こり、そのまま治らないで、からだがよろつく後遺症が残ることもあります。軽い中毒のときは、新鮮な空気を吸わせ、できれば酸素吸入をしてやれば、なおるものです。これは都市ガスのガスストーブの不完全燃焼のために起こる中毒と同じもので、狭い室内にガスストーブをつけっぱなしにして動物を置いて外出などすると、数時間で、こうした中毒症状を起こすものです。

電気こたつの場合は、このような有毒ガスはまったく出ませんが、こたつのなかに長時間はいっていると、いろいろな変調を起こします。最近の電気こたつの熱源は、赤外線電球が多く、それが出す多量の赤外線が、その質によってはたまたま動物の目を刺激することがあります。赤外線の波長は0.75ミクロンから1ミリのあいだにあり、目で見ることのできない光です。その波長が4ミクロン以上の長いものは、動物の粘膜や皮膚を相当強く刺激し、炎症を起こさせる作用があります。一般の照明用の電球もその光の中身のほとんどは刺激のない赤外線で、見える光は2，3パーセントしかないのです。赤外線電球は、より以上多量の赤外線を集中的に発光するようにつくられています。赤色の電球が多いのは、熱効果を高めるためにつけただけで、もともと赤外線は目に見えないのです。でもこたつ用の電球は、その波長が4ミクロン以下の光を出すよう設計されていて、粘膜や皮膚に刺激を与えないよう注意してあります。



ですからこたつに長くはいっていても皮膚に炎症を起こすことはありません。ネコがこの光で目を痛めることはあまりないはずです。でもたまたま結膜炎を起こすネコがいます。あなたのネコもそのようですが、あるいは使っているこたつの赤外線の波長が4ミクロンより長い光を多く出しているのかもわかりません。でも一般的に見てこたつ用の赤外線電球が不良だとは考えられません。原因はそのほかにあるのでしょう。

電球のすぐそばにもぐりこんで強い熱線を受け、急にからだがあたたまると、からだのほうでその応待にとまどい、体温を急いで調節しなければならなくなります。呼吸を速くし体温を発散させようとしますが、外からの熱のため、どんどん上昇し、それにつれてからだは酸素を多量に消費しはじめます。狭いこたつのなかの閉ざされた空間では、空気中の酸素も少なくなって、やがてまにあわなくなり、息苦しくなってきます。熱さと、酸素不足でネコは苦しくなり、ふらふらとこたつから出てきて、倒れるように寝てしまうものです。炭火こたつの一酸化炭素中毒とは違い、重症にはなりませんが、しばらくからだの調節をしないと、もとにもどりません。こんなからだの変調が目の充血を起こすことがあります。そこへ細菌の感染を受けると、強い結膜炎などが起こり、膿のような目やにが出るわけです。

こんなわけで、ネコやイヌをこたつのなかに入れるのは感心できません。目が悪くなったのをなおすより、入れないようしつけをするほうがたいせつです。もし目が悪くなったら、抗生剤とビタミンA、B_2などのはいった眼科用の軟膏を点眼するとよいでしょう。ひどいときは専門医にみせることです。■

（動物愛護協会附属病院院長）



熊本県下でクロハゲワシ保護

昨年12月25日朝，熊本県球磨郡山江村万江合子俣の万江川（球磨川支流）の川原で，いき倒れ寸前のクロハゲワシ1羽が，近くに住む中村勇男さん（林業）によって保護された。

クロハゲワシは，全長約1メートル，その名のように全身黒褐色の大きな鳥で，くちばしは6センチもあり，鉤状に曲がって鋼鉄のように鋭く，つばさはひろげると3メートルにもなり，日本で見られる最大のワシである。頭の部分には羽毛がなく，青みをおびた皮膚が裸出しているが，頭部には柔らかい綿羽や剛毛状の羽毛が密生している。また，後頭部にはえている羽毛はえり巻き状に長くのびていて，後頭部全体をおおい，なかなか威厳のあるりっぱな姿をしており，〝ハゲ〟ワシというイメージとは，違っている。



おりのなかで元気を取りもどした
クロハゲワシ＝山江村養魚場にて

クロハゲワシは温帯に分布する唯一のハゲワシで，バルカン，南部ヨーロッパを中心に北アフリカ一帯，東はウラル南部をへてヒマラヤ，チベット東部，モンゴル，中国北東部にかけてで，ユーラシア大陸のほぼ中央部を横断するように長く分布している。

日本へは定期的にくる渡り鳥としてではなく，迷鳥として，きわめてまれに渡来するにすぎず，これまでの観察記録はごく少ない。

熊本県に渡来する少し前，12月8日にも，ツルの渡来地として知られる鹿児島県出水市荒崎にも1羽のクロハゲワシが現われたというニュースがあった。とくに，ツルやカモを襲うわけでもなく，翌日にはどこへともなく飛びさったという。

今度山江村で保護されたのはおそらく，鹿児島に姿を現わしたのと同じ個体だろう。別に外傷を負っていたわけでもなく，その後山江村の村営養魚場に持ちこまれ，肉を与えるなどして保護され，しだいに元気をとりもどしているのは喜ばしいことだ。

それにしても，日本の自然は，はるばるやってきた，たった1羽のクロハゲワシの胃袋さえも満足させることができないほどに，恵み少なく荒廃してしまったのだろうか。たとえ渡来しなれない土地であってもである。■

（熊本県飽託郡・大田真也）

裏表紙説明

ミナミアメリカオットセイ 親子のむつまじい光景は，どんな動物でもほほえましい。ガラパゴス島と南アメリカ南端に生息するこのミナミアメリカオットセイ *Arctocephalus australis* の子どもは，生まれてまもなくひとり歩きを始め，母親のそばを離れず乳を飲んで育つ。しかしそれもつかの間，1週間後には，母親がえさを求めて海にもどるようになり，子どものそばを離れる時間はだんだん長くなる。そして1か月もすると，1週間か10日おきに乳を飲ませに帰ってくるだけになる。

でもだいじょうぶ。子どもは1度に4リットルもの乳を一気に飲みこむ。しかも，この乳には高い栄養分が含まれているので餓死してしまうようなことはない。生後3か月で子どもは離乳し，親子離ればなれの長い旅が始まる。しかしこの旅は，子どもたちにとっては試練のときだ。きびしい自然は目をむき，かれらのほとんどを死の淵につき落とす。もっとも，そこから〝オットセイ〟という名がついたのではない。これはアイヌ語の〝オットツ〟が語源である。■

Ph. Souricate-Jacana

▶訂正 70号18ページ左の写真（タイヨウチョウ類の巣）は天地が逆でした。また91号15ページの写真説明で，ルビートパーズハチドリの学名は *Chrysolampis mosquitus* の誤りでした。91号18ページ左の写真説明，アオカタバネハチドリ──→アオホソバネハチドリ，カタバネハチドリ属──→ホソバネハチドリ属と訂正。

次号予告
3月7日発売



オオジシギ

世界動物百科
103号　3／18

カラーページ

チドリ亜目（つづき）

オオハシシギ，タシギ，オオジシギ
コシギ，ヤマシギ，コオバシギ
ミユビシギ，サルハマシギ，ハマシギ
キリアイ，ヘラシギ，エリマキシギ

私たちの仲間

ピグミーと動物と（下） 自然人のこころ	酒井傳六
巨大なネズミたち アマゾン動物記 15	伊沢紘生
日本のシギ・チドリ類 2 カラーページ解説	高野伸二
生きものの世界への疑問 8 淘汰と適応	日高敏隆
漢字のふるさと 74 鸚鵡（おうむ）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

65 鳥綱　概説
66 スズメ目　アトリ，ゴシキヒワ，マヒワ
67 スズメ目　カナリア，ウソ，イスカ
68 スズメ目　シメ，ムネアカイカル，ホオジロ
69 スズメ目　スズメ，キンランチョウ，ブンチョウ
70 スズメ目　ベニフウキンチョウ，メジロ
71 スズメ目　ムクドリ，フイア，モズ
72 スズメ目　キセキレイ，タヒバリ，イワヒバリ
73 スズメ目　キビタキ，オオルリ，コヨシキリ
74 スズメ目　ウグイス，セッカ，キクイタダキ
75 スズメ目　コマドリ，ナイチンゲール，ノビタキ
76 スズメ目　イソヒヨドリ，ウタツグミ，ツグミ
77 スズメ目　ミソサザイ，カワガラス
78 スズメ目　ヒヨドリ，ソウシチョウ，キバシリ
79 スズメ目　ゴジュウカラ，エナガ，シジュウカラ
80 スズメ目　オオフウチョウ，マダラニワシドリ
81 スズメ目　カケス，カササギ，オナガ
82 スズメ目　ホシガラス，ハシボソガラス
83 スズメ目　コウライウグイス，ツバメ，ヒバリ
84 スズメ目　コトドリ，ヤイロチョウ
85 キツツキ目　キリハシ，ノドグロミツオシエ
86 キツツキ目　ハシボソキツツキ，アオゲラ
87 ブッポウソウ目　カワセミ，アカショウビン
88 ブッポウソウ目　ハチクイ，ブッポウソウ
89 ブッポウソウ目　オオサイチョウ
キヌバネドリ目　ケツァール
90 ネズミドリ目　アオエリネズミドリ
アマツバメ目　ヨーロッパアマツバメ
91 アマツバメ目　ノドアカハチドリ
92 ヨタカ目　アブラヨタカ，ヨーロッパヨタカ
93 フクロウ目　ナヤフクロウ，コノハズク
94 フクロウ目　コキンメフクロウ，アオバズク
95 フクロウ目　コミミズク，フクロウ
96 ホトトギス目　ホトトギス，カッコウ
97 オウム目　オオバタン，キバタン
98 オウム目　コンゴウインコ，セキセイインコ
99 ハト目　カワラバト，キジバト
100 ハト目　シラコバト，カンムリバト，サケイ
101 チドリ目　タマシギ，ミヤコドリ，コチドリ
102 チドリ目　オグロシギ，イソシギ
103 チドリ目　タシギ，ヤマシギ，エリマキシギ
104 チドリ目　セイタカシギ，トウゾクカモメ
105 チドリ目　ユリカモメ，カモメ，ベニアジサシ
106 チドリ目　ヒメウミスズメ，ウミガラス
107 ツル目　クロヅル，カンムリヅル
108 ツル目　フユクイナ，バン，コヒレアシ
109 ツル目　ジャノメドリ，カグー，ノガン
110 キジ目　ツカツクリ，ライチョウ
111 キジ目　クビワシャコ，ウズラ，ニジキジ
112 キジ目　ニワトリ，キジ，キンケイ，ギンケイ
113 キジ目　マクジャク，シチメンチョウ
114 ワシタカ目　コンドル，ヘビクイワシ，トビ
115 ワシタカ目　ハイタカ，イヌワシ，ハクトウワシ
116 ワシタカ目　クロハゲワシ，ヒゲワシ，ミサゴ
117 ワシタカ目　ハヤブサ，チョウゲンボウ
118 ガンカモ目　ツノサケビドリ，オオハクチョウ
119 ガンカモ目　ガチョウ，ヒシクイ，マガン
120 ガンカモ目　マガモ，アヒル，オシドリ
121 ガンカモ目　ホシハジロ，クロガモ，カワアイサ
122 コウノトリ目　ベニフラミンゴ，ゴイサギ
123 コウノトリ目　シュモクドリ，コウノトリ，トキ
124 ペリカン目　オオペリカン，シロカツオドリ
125 ペリカン目　カワウ，ウミウ，グンカンドリ
126 ミズナギドリ目，カイツブリ目，アビ目
127 シギダチョウ目，キーウィ目，ヒクイドリ目
レア目，ダチョウ目
128 ペンギン目　キングペンギン，コビトペンギン
以下129～144　両生類，爬虫類
145～160　魚類　161～192　昆虫類，甲殻類他

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

1 概説 I　生態学，自然保護
2 概説 II　動物分類学，生物学的環境
3 霊長目　ゴリラ
4 霊長目　チンパンジー，オランウータン
5 霊長目　テナガザル，オナガザル
6 霊長目　カニクイザル，ヒヒ
7 霊長目　キヌザル，オマキザル
8 霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
9 食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
10 翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
11 齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
12 齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
13 齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
14 齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
15 齧歯目　リス，ムササビ
16 齧歯目　ウサギ
17 食肉目　チーター，ライオン
18 食肉目　トラ
19 食肉目　ヒョウ，ジャガー
20 食肉目　ピューマ，ヤマネコ
21 食肉目　イエネコ
22 食肉目　ハイエナ，マングース
23 食肉目　ジェネット，カワウソ
24 食肉目　スカンク，アナグマ
25 食肉目　テン，クロテン
26 食肉目　ミンク，イタチ
27 食肉目　パンダ，アライグマ
28 食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
29 食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
30 食肉目（家犬）　イヌ概説，盲導犬，警察犬
31 食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
32 食肉目（番犬）　日本犬，セントバーナード
33 食肉目（愛玩犬）　スピッツ，チワワ
34 食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
35 食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
36 食肉目　オオカミ，コヨテ
37 食肉目　アザラシ
38 食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
39 奇蹄目　サイ，バク
40 奇蹄目　ウマ概説
41 奇蹄目　サラブレッド，ポニー
42 奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
43 岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
44 偶蹄目　ヒツジ
45 偶蹄目　バーバリシープ，アイベックス
46 偶蹄目　ヤギ，カモシカ
47 偶蹄目　ガゼル，インパラ
48 偶蹄目　ブラックバック，ヌー
49 偶蹄目　ローンアンテロープ，ダイカー
50 偶蹄目　バイソン，アフリカスイギュウ
51 偶蹄目　ウシ，スイギュウ
52 偶蹄目　イランド，ブッシュバック
53 偶蹄目　キリン，オカピ，ノロジカ
54 偶蹄目　トナカイ，ヘラジカ
55 偶蹄目　アカシカ，マメジカ
56 偶蹄目　ラクダ，ラマ
57 偶蹄目　カバ，ペッカリー
58 偶蹄目　イノシシ，ブタ
59 貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイ
センザンコウ，ツチブタ
60 海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
61 鯨目　イルカ，マッコウクジラ
62 有袋目　カンガルー，バンディクート
63 有袋目　コアラ，フクロネコ
64 単孔目　カモノハシ，ハリモグラ
概説・哺乳類索引

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03—212—0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06—231—0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1—12—1　〒802
TEL. 093—531—1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1—3—3　〒460
TEL. 052—231—8131

世界動物百科　通巻103号　昭和48年3月11日発行　（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ミナミアメリカオットセイ

説明 30ページ

雑誌0632－3／11